「篠原一男 100の問い」への「100の応答」

100 Responses to Kazuo Shinohara's 100 Questions

篠原一男は、建築作品とともに多数の言説を遺した思想家でもありました。
本展覧会ではそれらを「問い」と捉え、篠原が遺した特徴的な100の言葉を選び展示することを試みています。
篠原が自らに問い続けたものとは何だったのか。篠原を直接知らない世代が篠原の言説をどう受け止め、そこにどのような意味を見いだすのか。
1980年以降生まれの100人に篠原の「100の問い」を投げかけ、応答としての言葉を寄せていただきました。
この応答が、より多くの方にとって、篠原の問いを自分ごととして考える架け橋になることを願っています。

キュレーター = 奥山信一・貝島桃代・セン・クアン　企画・編集 = 貝島桃代・小倉宏志郎　発行 = TOTOギャラリー・間

1 モジュロール批判

『学会関東支部第17回研究発表会』日本建築学会、1955年

琵琶湖に浮かぶ竹生島には、宝厳寺唐門という極彩色に彩られた唐破風を持つ門がある。秀吉を祀った京都東山の豊国廟の極楽門が移築されたものであるが、この極楽門も大阪城極楽橋から移築して建設されたという。したがってこの唐門は、元々大阪城極楽橋にあったことになる。竹生島は、花崗岩の一枚岩でできた無人の小さな島である。宝厳寺、都久夫須麻神社、数軒の土産物屋が花崗岩の段上の平地を縫うようにして建っている。宝厳寺唐門は、竹生島の小さな平地面からすると完全にスケールアウトした存在であるが、こちらに迫り来るような異様な迫力を持っている。都久夫須麻神社に祀られるのは、浅井姫命という水神であり、浅井家の氏神にあたる。浅井家出身の淀殿は、なんとしても秀吉の遺構を自らの祖先の地に移築したかったのだろう。「移築」は、時としてモジュロールのようなその場所や人への適合の範疇を超えた事象が起こりうるから面白い。（川井 操／あしがる出版主宰、滋賀県立大学環境建築デザイン学科准教授）

2 この国では、世界は虚空であった

『学会論文報告集 第57号』日本建築学会、1957年

小学生の頃、セキセイインコを飼っていた。ある時インコの具合が悪く、連れて行った先の動物病院の先生が、その場でさらっと鳥の断面スケッチを描いてくれた。それはくちばしから喉を通り、胃袋と腸を抜けて肛門からまた外へと続くひと連なりのヴォイドで、先生はそれを指さして、ここはすべて外です、と言った。何のための説明なのか肝心なことは忘れてしまったが、その時から自分自身の体内にも捉えることのできない外があるという感覚を持っている。建築をつくる時にも、少し似たような感覚があるかもしれない。私たちが空間と呼んでいるものは、ある刹那は中であっても、どこからか知らぬ間に外に移り替わる。その空気の塊は、物のように明確な形を持って存在するのではなく、偶々物と物の間に寸法が与えられただけの、虚空ということなのかもしれない。篠原さんの言葉を読んで、そのようなことを思った。（山田紗子／山田紗子建築設計事務所代表）

3 貴族的なもの／庶民的なもの

『学会論文報告集 第63号』日本建築学会、1959年

寝殿造と民家、その対比の中に篠原は〈日本的なるもの〉を捉え、貴族的なもの／庶民的なものという言葉を通じて接近した。処女作である「久我山の家」（1954年）では桂離宮的な表現への探求があり、「久我山の家 その2」（1958年）においては民家への関心が空間化される。貴族的な形式や造形と、庶民的な生活の空間。あいだで揺れ動く姿に私たちも共鳴する一方、形式と生活といった問題系の限界も感じている。▼寝殿造の発生の源流を探る篠原は、「建築と地表との間の空間」に着目した。屋根や基壇や高床など造形の変遷を、機能や生活ではなく美学的問題として捉えた。また、不安や断絶感といった「黒々とした情念」を受け止める空間の必要性を訴え、篠原は土にそのイメージを仮託して住宅の中に飲み込んだ。▼生活ではなく、死を含みこんだ「生」を受け止める建築。その造形を、地表と建築の関係から考えることに本問を乗り越える活路があるだろう。（伊藤孝仁／AMP / PAM主宰）

4 空間の分割と連結

『学会関東支部第28回学術研究発表会』日本建築学会、1960年

「分割と連結」と聞いた時、篠原一男と臼井晟一の対比を思った。共に日本建築の伝統を抽象する試みがなされたが、臼井がその日本的表象に反して自律した空間を連結する西洋的原理に拠ったことに対して、篠原は寝殿造から書院に至る過程の中で、全体から分割する比例寸法による空間原理を見ようとした。日本建築の内部空間を考究する篠原の問いの続きを考えてみると、庭と建具に至る。寝殿造も書院も庭がなければ成立せず、回遊式は元より、光浄院に代表されるように、見る庭も建具に描かれた自然画などで建築内部と連続している。平安時代の『類聚雑要抄』では、建具は建築と同値で指図に記載され、柱間によって全体から分割された空間を再分割・再統合する有効な手段である。篠原と臼井の対比はあくまで建築内部を扱う近代建築としての問題に過ぎないが、外部と内部の境界を扱う現代建築において、篠原の問いはより発展的に生きていると思われる。（渡邊大志／リンクアーキテクツ主宰、早稲田大学建築学科准教授）

5 伝統論は創作の出発点でありえても回帰点ではない

『新建築』1960年4月号、新建築社

「伝統論」を「伝統」として読み替えて考えてみたいと思う。篠原の問いから出発するのではなく、篠原がこの問いに至る前の点から読み解くために。▼伝統は、古くない。▼伝統の奥には普遍性と特殊性を兼ね備えた革新がある。その革新は現代では定石となっていて気付きにくいこともある。▼なお、形骸的なコピーを重ね大衆化した伝統に見るべき点はない。突出した特異点が伝統の源流となっていることに留意すべきだ。本質を深く掘れば単に回帰することはない。▼フランク・ゲーリーの同様の言葉を引用しておく。篠原の住宅論を読んでいたかは、いつか聞いてみよう。▼〈"You can learn from the past, but you can't continue to be in the past; history is not a substitute for imagination."—Frank Gehry〉（三井 嶺／三井嶺建築設計事務所代表）

6 時間のつくる誤解

『新建築』1960年4月号、新建築社

篠原の日本伝統論における言葉の一つ。篠原は再建された金閣寺を見た際に、それまでの黒ずんだ金閣寺も素晴らしいが、金箔の輝きがこの建築の生命線であり、当初の姿を知らない者は後者の価値に気付きがたいと言う。前者にわびさびにも通ずる中世的表現を、後者に煌びやかな黄金趣味に強烈な表現意欲を見出した。作者が意図する建築の価値と、時間がつくる偶然の価値を冷静に区別するべきだと指摘するが、時間による価値を否定してはいない。この力は、例えば経年変化する木構造や有機的な素材等に起因するかもしれないが、果たして現代建築に時間のつくる誤解は生まれるのだろうか。そのためには、建築は長く残らないといけない。もちろん、設計者として時間に頼らない建築の可能性も探したい。一方で、良い建築をつくる、という単純な目的で考えれば、時間による偶然的な価値も付加できるなら、より一層良い建築を残していける、とも考えられる。（岡 佑亮／chidori studio）

7 すまいは広ければ広いほどよい

『新建築』1961年1月号、新建築社

大邸宅は作品にならない。日本の建築業界では、ときおりそんな言葉が聞こえてくる。篠原の「すまいは広ければ広いほどよい」という言葉はいっけん一般的な意見のようだが、機能主義的でコンパクトなモダンリビングがもてはやされた60年代初頭にあって、業界にはこのフレーズが挑発的に響く状況があった。そして、その状況はそのまま今につながっている。▼近年の住宅は、空間だけでなく建築家の人格や施主の事情、生活態度に結びつけて評価されてきた。そこに「切実さ」「潔さ」といった態度や「固有性」「必然性」といったキーワードが加わることで、ますます小住宅に注目が集まるようになる。この状況は豊かな住宅文化を生みだす一方で、大邸宅を、可能性の探求が不十分なまま孤立させてきた。大邸宅に無駄な空間＝必然性とは異なる質を見出すべきという篠原の提言は、空間と人間の、機能を超えた関係を問い直すために、時代を超えてなお有効であり続けている。（向山裕二・上野有里紗・笹田侑志／ULTRA STUDIO共同主宰）

8 不足した空間／無駄な空間

『新建築』1961年1月号、新建築社

〈不足した空間／無駄な空間〉との問いに、僕は英国で設計に携わった極小住宅（micro compact home）を思い出した。2・6m立方のアルミの箱に居住に必要な機能が立体的に格納されており、工場生産した箱をヘリで運搬し設置するという、徹底された工業製品である。2段ベッドを兼ねた5人まで座れる座卓がある一方、その空間的制約ゆえ住人はかえって自身の生活の見直しを促されるのだと解説されることもあった。特定の敷地条件からも施主の条件からも自由な「住宅のプロトタイプ」の創造者たろうとした篠原は、極端に大きな広間のような「無駄な空間」にも極めて小さな家に生じる「不足した空間」にも共通する「人間と空間との格闘」こそがすまいの本質であると述べ、「大きな家と小さな家との間に不連続な方法をとるべきではない」と主張した。篠原の言葉は、小さな建築を突き詰めた先に大きな建築にも通じる方法論を探求する者へのエールにも僕には聞こえる。（小見山陽介／京都大学講師）

9 様式がつくられるとき

『デザイン』1962年8月号、美術出版社

今、建築に様式は必要でしょうか。情報化やグローバリズムの影響を受ける現代では、多様なスタイルが次々と生まれては消え、その断片的なイメージが仮象されるかのように建築がつくられています。▼様式は場所に依存しない普遍的な概念ですが、それが顕在化したのは比較的近年のことではないでしょうか。世界のどこかで、自分たちと似たようなことをしている人たちがいるということが、多様なメディアを通じて実感されます。▼また、様式とは、長い時間の中で、数々の実践を通して見出されるものだと考えます。それは現代の加速する時間軸とは異なるリズムを持っていますが、そもそも建築は何よりも長い時間軸に位置付けられるものです。したがって、今、様式をつくることが、例えば過去の優れた様式が時代ごとに再解釈され続けてきたように、建築を本来の時間軸へと再定位する行為であるならば、それは大きな意味を持つのではないでしょうか。（久米貴大／Bangkok Tokyo Architecture 共同主宰）

10 失われたのは空間の響きだ

『近代建築』1962年10月号、近代建築社

「響き」は個人の身体を中心にしたきわめて主観的な、親密な、あるいは直接的で内向的な感覚だ。とりもなおさず建築と身体が空間を介して相互に影響を及ぼしあう状況を想像しなければいけないのだが、とはいえ、身体が受動的に空間を感知するだけでは「響き」は生まれない。では、欲望する肉体が垣間見せる情念・衝動が、予定された機能と合理的な諸物の連関と科学的な生活の組立のすべてを断ち切り、建築に非合理性を介入させる、とすれば？　建築が空間を介して身体に侵入し、（たとえば「美しい」という）主観的な判断が建築へと跳ね返ること。失われた空間の響きを取り戻すことは、この相互作用を通して主体そのものが変容し、同時に世界そのものを書き換えてしまうことの可能性だ。建築はこのとき、人間的ではないが、同時に人間的でなくもないような、矛盾を抱え込んだものとして現れる。（大村高広／茨城大学助教）

11 住宅は美しくなければいけない

『近代建築』1962年10月号、近代建築社

私にとって、住宅が美しいということはどういうことだろうか。建築が美しいとは違い、住宅が美しいとは。住宅は一般的な建築とは違い、施主の個性・敷地条件などの外的要因が色濃くなる傾向がある。そうすると、特殊解的建築になりやすい。そして住宅という領域においては、その特殊条件に向き合うことと、普遍性を持った建築を構築すること。その二つがせめぎ合う状態にこそ、美しさが宿ると私は信じている。建築単体が自律的につくりだす美しさには限界があり、建築の外側にある様々なものと手をつなぐことで生まれる美

しさには空間的・時間的広がりがあると考えているから。だが、篠原一男によって完全に否定される。施主や敷地の条件といったくだらない特殊性を捨象して一般化することこそが大事であると言う。そして予言していたかのように、「から傘の家」（1961年）は窮屈な敷地から移築され、今気持ち良さそうに生きている。だから建築はおもしろい。（萬代基介／萬代基介建築設計事務所）

12 誤解された機能主義

『近代建築』1962年10月号、近代建築社

戦後日本の住宅設計において、アメリカの住宅に学んだLDKの空間は平面要素だけをまんべんなく詰め込んだ結果、「人間が快適に生活するために」という本来の目的が失われ、機能主義が合理化の旗印となったことを篠原は嘆いた。ここで注目すべきは、どんな狭小住宅でも「無駄な空間」が必要であり、そこに家族の「象徴性」が宿るという主張である。たしかに、篠原の設計する住宅には、独特な余白が存在するように感じる。▼ところで、私は最近「森の書庫」というジグザグの屏風状の壁で構成された建築の設計をした。書架の設計においてL字の角という一番「無駄な空間」を増幅させることで、本を読むアルコーブ空間など小さなスケールの人の居場所を作り、空間のよどみや流動性を表現した。角を前提とした時に出てくる余剰空間が、この建築を形作っている。人とモノのための機能主義＝非合理な空間に、篠原の言う核〈コア〉が存在すると私は考えている。（高池葉子／高池葉子建築設計事務所）

13 住宅は芸術である

『新建築』1962年5月号、新建築社

住宅は建築である。誤解や反撥を承知の上でこの発言をしなければならない地点に、わたしたちは立っている。建築は〈建物〉から独立すべきである。過去の記念碑や比較的近年の巨大建造物こそが建築とされていたように、今日では住宅が建築であると考える。住み手の注文に応じ、条件下で設計に熱中し、その工事現場に立ち会い細かく仕上げに気をつかい、完成を見守る仕事は、正当な建物生産というものからはずれている。社会的・経済的・環境的な諸問題への世界的な関心が高まるにつれ、近年建物生産はさらに複雑化、専門分化している。技術官僚的な建物生産の奔流からみると、住宅設計はその流れの泡沫である。ひとりの建築家がどのように頑張ってみても、この社会の生産活動が変化するとは考えられない。しかし、それは建築家の役割ではない。泡沫が水の流れとは異なる存在であるように、建築もまた建物とは異なる。全ての建物が建築ではないのだ。（高杉真由・ヨハネスベリー／スギベリー）

14 住宅は文明批評だ

『新建築』1962年5月号、新建築社

文明。現代日本では目にすることの少ない、大きな言葉だな、と思う。「住宅は文明批評だ」と言ったとき、篠原は機械文明と、都市計画文明とでもいうべきものを、批評の対象に据えていた。今日では両方とも古ぼけた概念である。篠原の小さな「住宅」が、その仮想敵である大きな「文明」よりも持続的かつ普遍的だったという事実は痛快だが、批評対象の弱体化は、当然、批評自体にも跳ね返る。他力本願的だが、誰もが「今日の文明」と思える力強い状況が存在しない限り、住宅は「文明批評」になり得ない。それでは、現在の建築家が批評すべき、今日の文明は何だろうか。幸か不幸か、その兆候は現れている。人間を凌駕する知性を獲得しつつあるAIは、新しい文明を築くだろう。巨大なデータベース上を駆動するAIたちの創作は、建築生産の場も変えるだろう。個のなかに普遍を見出そうとする篠原的な方法が、人間建築家に残される最後の砦になるかもしれない……。（岩元真明／岩元設計室主宰、ICADA共同主宰、九州大学准教授）

15 芸術の総合、それは調和のことではない

『新建築』1963年11月号、新建築社

複雑化する現代社会の中で、われわれはたえず変化し続ける社会的状況に応答しながら様々な解決をはかる、調停者になってしまってはいないだろうか。▼篠原は、建築家は空間を設計する芸術家であると言った。▼建築を芸術と捉えるならば、そこは生身の人間が立った時、より多くの感情や思考、時にヒラメキが生み出される創造的な場所であるはずだ。そして、その空間を成すひとつひとつの要素や造形は、それぞれが意味や背景、製作にかかった熱量をもって存在する。ほどよく調整され好ましく配置されることを許さないそうしたものたちが、一つの場で出会い相互にぶつかり合う時、その場から人は様々な感情を得ることができ、人間と空間との間には生き生きとした活発なやりとりが生まれる。このような空間が、矛盾や不合理さをはらんだ生命のように存在する時、建築は時代に消費されることをまぬがれ、時間を超えて存在していけるのではないだろうか。（玉田 誠＋脇本夏子／玉田脇本建築設計事務所）

16 美しい日本の空間はすべて正面において存在する

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

正面で空間を捉えるためには、距離をとる必要がある。デジタルカメラの広角の性能は高まっても、現代のどれだけの日本の家が、正面から捉えられるほどの十分な大きさを持っているだろうか。篠原一男のつくる空間は白くて、木の柱や架構、建具といった要素が抽象性を保ちながら空間にアクセントを与えている。では、今、あなたがリモートワークしている、本と洋服と飲み物とお菓子が散乱した部屋は、日本の美を体現していないのか。都築響一の『TOKYO STYLE』（1993年）は、東京の住まいのリアルを撮影した写真集である。しかも真正面から。これは紛れもなく、日本の空間の美であると思う。大きな家でなくても、抽象的な構造体や、繊細な建具をつくることができなくても、美しい日本の空間はつくれる。いや、すでにそこにあるんだ。都築響一はそう言っている。篠原一男は、正面という日本の建築の見方を教えてくれていたのだ。（クマタイチ／TAILAND主宰）

17 民家はきのこである

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

この問いのユニークさは、まず今も引用が繰り返され、誰もが建築にきのこ像を見いだせる開放性にある。時に隠花植物の日陰性、家形との相似造形、菌糸体のノンヒエラルキー構造、傘が広がる生長アクション、建材のサスティナビリティなど、本意を逸れ、創造性を育むメタファーとなっている。▼また対比的な、民家を基点としたアンビバレントな思想・表現の緊張関係にも注目したい。篠原は民家の建築的意味を、集落の美、無意識の自然現象、自然と人間の葛藤が与える力強さ、人間とすまいの生きた交流、と記している。現代を予言するかのような建築観が、伝統空間解釈から紡がれている。しかし性急な設計への接続は避けられ、篠原の意識下で構築された住宅の自律性は、民家の対極にも映る。▼一方、この問いと同時に「現代の集落（都市）が表現するものは、調和した美ではなく、混乱した美であっていい」と記し、後年の建築への軌跡が60年代に予告されている。（稲垣淳哉／Eureka共同主宰、早稲田大学芸術学校准教授）

18 無作意を装うた作意の極限

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

これは優れた茶室に向けられた言葉である。篠原は、茶室の対極に民家を据えていた。「民家はキノコである」で始まる民家論では、その造形がいかに美しくとも、意図されてない無作意のもので自然現象に近いことを述べている。対して茶室は、民家が持ちえなかった「法則的な造形の文法」を取り出すことに成功した。だが、茶室の造形法則の抽出の純度が高すぎるあまり、それに則って反復することの意義を見出すことは、現代において困難である。このテキストでは、民家と茶室の間に潜むものが何かを問われている。篠原の設計は、抽象化を突き詰めた平面・立面、「空間性の無性格化」に向かっていた。そして、民家に造形の法則をもちこみつつ茶室ほどの作意を持ち込まないことで、建築が反復される可能性を開こうとする志向も見え隠れする。篠原建築には移築・修復されたものがあるが、これらには民家でも茶室でもない、場所や時代を超えて反復される永遠性を感じる。（藤田雄介／Camp Design主宰）

19 人間の情念の活動

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

この言葉は、「無駄な空間を」という文章の「合理性が人間の理性の活動を示すものなら、非合理性は人間の情念の活動にかかわるものだ」から抜き出されたものだ。文章は、こんな書き出しから始まる。「住宅というものは広ければ広いほどよいのだ。その中にたったとき、向い合った壁が遥か遠くに見えるような住宅をつくりたいと思い、そして、住んでみたいと思う。人間はどのくらいの広さまで耐え得るだろうかという実験に、私は大変に興味がある」。近代以降の建築に限らずさまざまなものづくりの考え方の中心に、現代もなおどんと鎮座している、合理主義と機能主義を超えた設計のすすめについて書かれたものなのだが、僕がとにかく共感したのは、最後の「実験に、私は大変に興味がある」という部分だ。誰に頼まれていなくても、合理性がなくても、人間の情念の活動として、実験的であるということに大変に興味があって、そうありたいと思っている。（元木大輔／DDAA / DDAA LAB代表）

20 現代の集落が表現するものは混乱した美であっていい

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

学校の制服が苦手で私服で登校できる学校ばかりを選んできた自分の10代を振り返れば、同質なものが反復するところに自ずと生じる全体性や、調和の美に潜む同調の力から避けるように、自由な場、つまり「混乱した美」に靡（なび）いてきた、ということになる。篠原一男は「混乱した美」を「乱暴なランダムネス」「ズレを含んだ非統一構成」と言葉を換えながら、それは現代集落としての都市を描写する説明用語であって、方法論にはなりえない、つまり「都市は設計できない」と言う。たしかに、この方法論で計画された都市をぼくは知らない。いやむしろ、設計できていない都市だけが混乱した美をまとう現代集落と言えるのだろう。ぼくたちは、設計できていない状態を設計する、その途方もない矛盾を理解し、都市は設計できないと言い切られてもなお、混乱した美に憧れる限り、その一端を設計できないか、と、この先もがき続けるに違いない。（品川雅俊／ASパートナー）

21 複製住宅

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

オリジナルのものが限られた人々だけでなく、より多くの人々にアクセスできるようにする手段を「複製」と解釈すれば、自身が設計した住宅のデータを公開し、誰でもアクセスできるプラットフォームは「複製」、これを使ってできた住宅は「複製住宅」と定義できよう。複数の人がデータを載せ、要素技術にタグ付けすることで、他者は特定の技術を参照し組み合わせることが出来る。すると、過去の作品の技術を継承した新しい「複製住宅」が生み出される。住宅は一品生産であり、一人が設計をこなす数には限りがある。しかしこの世界には、過去膨大に作られてきた住宅設計の技術が蓄積されている。失敗も成功も含めてオープンソース化することで、長期的な視点で見た遺伝的アルゴリズムによる最適化が行われ、よいところを掛け合わせた「複製住宅」に進化するのではないか。ただし、その土地の気候や文化を慮り、建築の基礎知識を持って正しく使うことが前提である。（荒木美香／Graph Studio、関西学院大学准教授）

22 シンメトリーというのは力

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

好きなシンメトリー。▼葉脈が右へ左へと伸びやかに広がって、光を受け止めている生まれたての若葉。ろくろでつくられた、その薄い口端にまで、まんまんと水をたたえた白磁の器。こんもりと積み上げられた雪の中に、まるくくり抜かれたかまくら。▼嫌いなシンメトリー。▼豪奢な飾りを纏った中央の玉座に向かって、一直線に視線を集める宮殿。一段高く据えられた基壇の上で、暗く冷たく光る墓石。両脇にずらりと扉を並べた、行き止まりの廊下。▼シンメトリーというのは力。その力は、権力と結びつく時、澱んだ精神とともにある時、冷たく死んだものとして現れる時、耐え難いものとなる。しかしその力が、みずみずしい精神とともにある時、透明で生きている時、何かをそっと包みこむ時、私たちの生を讃えるものになる。（大西麻貴＋百田有希／大西麻貴＋百田有希／o+h）

23 激突の美学

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

大学を出てすぐだから、二人で設計をはじめて18年近い。なにも分からないまま、なんとなく口裏を合わせたかのように「違和感のない違和感」をつくりたいと話していた。少しして、設計したものが他者に「案外いい」と言われるのが最上の褒め言葉になって、それから「一見無駄なもの」がつくれるようになりたいと思い始めた。違和感のない違和感は、どこか慣習を前提に組み立て直す思考回路で、案外いいというあたりから、だんだんと他者がパッと解読できない範囲で物事が立ち上がっているかどうかが重要な一つの基準になった。机を共にし、同じ釜の飯を食っているとこの辺りまでは探り当てればツーカーで、でも二人にとってそれが慣れとなって、どこか作業に近い状態になったその頃から、お互いの生活リズムや家庭環境が変わってきた。実は、そこからやっとそれぞれをぶつけ始めているかもしれない。これから何が生まれるかわからない不安と楽しみがある。（増田信吾＋大坪克亘／増田信吾＋大坪克亘共同主宰）

24 視点不在の空間

『住宅建築』紀伊國屋書店、1964年

「視点不在の空間」という言葉から、想像上の空間、視点が通らない死角のような空間、普段使わない倉庫や納屋のような空間、空き家などの空間を連想した。都市空間に置き換えて考えると、人の往来の無いような空間を連想した。自身の研究の立場で考えると、人に意識されていない空間を連想する。▼以前、小さな集落を訪れた際、地元の人は「ここには何もない」と言っていたが、我々よそ者から見ると、そこは価値ある空間に見えたという経験がある。狭い路地、木造建築、共同井戸、祠、雁木、係留された船、海岸に干された魚の仕掛け網など時間をかけて育まれてきた瀬戸内らしい風景が広がり、素朴な集落の良さが存在していた。しかし、地元

の人にとっては当たり前の景色であり、その空間の価値に気付いていないのである。視点不在の空間には、その場所本来の姿が眠っているのではないだろうか。（樋渡 彩／近畿大学講師）

25 3つの原空間

『新建築』1964年4月号、新建築社

無色透明で操作可能な空間概念への批判から、それ以上分解できない「3つの原空間」を空間の原形質として提案した篠原一男。60年後、私たちはそれを建築空間のみならず、日常の原体験に探ってみる。▼装飾空間。木や花を植え、水をやり、剪定する。通りから、あるいは部屋からの眺めが美しくなるよう日々手入れされた庭は、二度と再現できない生きた証となる。▼機能空間。日差しの強い夏、街中で青々と茂った大樹の下に座る。木陰、そよ風、葉の擦れる音。また一人腰を下ろした。心地よさが伝播している。▼象徴空間。暗渠の上の緑道を歩く。そこには今も昔も街の坂道が流れ落ち、自然と人が集う。先には古寺があるらしい。無意識に継承された暮らしが染み付いていた。▼これら唯一的・共時的・通時的な形で人ともものが出会うところに「原空間」を見出しうるならば、それはつくられたものとして完結せず、私たちの経験とともに生き続けているのかもしれない。（大山亮・片山果穂・笹木 聖・渕野剛史・増井柚香子・宮﨑 陸／6lines studio）

26 ルーレットをとめたまえ

『新建築』1964年4月号、新建築社

建築という言葉は、長らくその外延を伸ばし続けてきた。今や建築家が向き合う対象は、新築／リノベーションの枠を超え、あるエリアへの介入から小さなメンテナンスや補修、さらにはゲーム上の仮想空間や建築に関するサービスの開発にまで拡張している。一口に建築と言っても、どのような文脈を踏まえているかを理解しないと、話が噛み合わない。では、なぜゆえに、これら多様な建築の実践は、建築という名の下にとどまるのか。かつて篠原一男は、この世に存在する数多の色彩が3つの原色からなるように、建築空間にも3つの原空間があるとし、それを知るべく周り続けるルーレットを止めるべきだと語った。分裂寸前の建築をいまなお繋ぎ止めているものが何かを明らかにするために、自身の目の前にあるルーレットの盤面を確かめるべきではないか。「ルーレットをとめたまえ」。そのとき、盤面にある色は、篠原がかつて見たものと同じか、違うか。とめるのは今だ。（川勝真一／けんちくセンターCoAK）

27 いかなる都市デザインからも自由である

『建築』1964年4月号、青銅社

暗闇に小さな火を灯す。光が現れると共に熱が広がる。薪に届けると炎が宿り、バチバチと音を立てて燃えはじめる。芳しい匂いが周囲に充ち、天高々と煙が上る。すると人々が集まってきて、輪ができる。風向きにより、円は歪み形を崩す。折重なるように人が層を成し、溜まり語らい合い始める。歌い始める。もう獣たちは近寄れない。小さいとも、大きいとも言える、美しい境界だと思う。建築の始まりだ。熱が届かなくなる辺りから人々は流れ始め、小径ができる。都市への予感だ。揺れ動く炎に鼓動の高まりを感じる。その感動は瞬く間に広がり様々な文化をつくった。多くの建物の中から火が去った今、私たちの拠り所は何か。土台、屋根、囲いで組織された、いわゆる建築物を考える事だけに躍起になっている場合ではない。かつて人間がはじめて火を前にした悦びと畏怖を建築に灯すのだ。暗闇の中に小さな〈火〉を灯す、そこから新たな都市の姿を描き始める。（Aleksandra Kovaleva+佐藤 敬／KASA、明治大学兼任講師／横浜国立大学・早稲田大学・東京藝術大学非常勤講師）

28 敷地は設計の出発点ではない

『建築』1964年4月号、青銅社

いま、設計における「偶然」について、どのように考えることができるのでしょうか？ ▼敷地は自分の意思とは別にやってきます。依頼してくれる発注者も、工事してくれる工務店も、検討してくれるスタッフも、自分の意思とは別にやってきます。そもそも自分が建築を考えるようになったのも、こうして建築を考えることができるのも偶然なのかもしれません。もっというと、人生がはじまることも終わることも、自分の意思とは別の次元にある偶然によるものだと感じます。▼あらゆる物事に明確な出発点などなく、あるのは一人の自分とたくさんの偶然とのあいだのインタラクションです。自立しているように見えていた自分の意思も、断続的なインタラクションの果てに存在する、一時的なものなのかもしれません。だからこそ、いま設計を考えることは、「偶然」との良い関係をデザインすることとも捉えられるのではないでしょうか。（松岡大雅・寺内 玲／studio TRUE共同主宰）

29 住宅は広さがすべてに優先する

『建築』1964年4月号、青銅社

篠原にとって「広さ」以外の与件を捨象することは、設計における唯一の出発点であるとともに、抽象を構築するための手段だった。1964年当時の『建築』には、この鮮烈な警句と合わせ、「大屋根の家」（1961年）が掲載されている。〈にわ〉と他諸室との線の取り合いに目を凝らすと、伝統から引用された手法と、合理では回収されない独自の秩序の共存がみえる。写真の中では、プルーストの小説のように、虚と実が均衡を保っている。一間に起こる相乗によって構築された抽象の力は、紛れもなく〈空間の核〉と呼べるだろう。そしてそれは、過去と現在の時差による意味の相乗によって更新される。私たちは恐らく、かつて篠原が伝統の中で知覚したように、「空間の造形と意味との間に生きつづけている関係に巻き込まれている」のである。篠原は「広さ」という物理的数値に線を刻み、構成をつくり、抽象を通して、そこに未来への「広がり」を詠んでいた。（新森雄大／Niimori Jamison共同主宰）

30 どのように使われようと自由である

『建築』1964年4月号、青銅社

初めて設計をした住宅が、大変に批判された。通りに面してガラス貼りの吹き抜けの部屋をつくったからだ。「住人が見世物のようでかわいそう、どうせカーテンで閉じるだろう」などの内容だったと思う。事実、カーテンは閉めて生活することになる。当然その光景を想像しながら設計をしていた。大きな吹き抜けとぼんやり光る大きなカーテンが、生活の猥雑さを許してくれることに期待したからだ。篠原一男の「どのように使われようとも自由である」という言葉から感じるのは、生活に対する無関心ではない。混沌とした生活に対して建築家ができることを考える誠実さだ。生活に寄り添うだけの設計が、暮らしを豊かにしてくれるだろうか。フォトジェニックな幾何学は鑑賞用として保存されるべき存在ではなく、圧倒的に生々しい生活に凛とした心地良さを生む強さだ。空間と生活が矛盾することなど最初から分かっている。その矛盾を許してくれるこの言葉に、今も勇気づけられている。（能作淳平／junpei nousaku architects代表、富士見台トンネル代表、株式会社みんなのコンビニ代表取締役）

31 虚構の空間を美しく演出したまえ

『建築』1964年4月号、青銅社

身を構える、カメラを構える、バットを構える。そのストップモーションがもつ僅かな時間は、同時に次の瞬間に繰り出される動きを、一瞬の静止のなかに宿している。篠原一男の建築を写した写真が切り取る、空間がもつ美しさ。それは同時に、建築という極めて現実的でフィジカルでファンクショナルな要求との付き合いのもとに生み出されているが、瞬間、その虚構が豊かな現実を奪い去ることもある。ふり返って現代の建築は、賑わうこと、包容力のある部分の集合が求められてもおり、そのあり方は対比的でもある。いま篠原の建築から学ぶものがあるとすれば、この一瞬の静止を、建築家はつくり得るかという問いだろうか。美しさを内側に立て、虚構を提示する。見る者すべての時間を、ほんの一瞬でも奪い去るような美しさは、昨今のリアリズムが見落としている社会の倫理を、再び問い直してくれる。（本橋 仁／金沢21世紀美術館レジストラー）

32 設計はその施主からも自由である

『建築』1964年4月号、青銅社

この言葉だけ取り出せば、有名な「住宅は芸術である」と並んで、今では非常に傲慢な芸術家気質に聞こえる。その後、何十年も住むのは施主だし、施主にとって住宅は、一生に一度の高い買い物なのだ。それを建築家に「自由に」作られてしまっても、考え物だ。こんな考えが一般的な現代社会だからこそ、むしろ、この言葉の意義が増してくるとも言える。実際、最近では公共性だ、社会だ、サステナブルだ、といいながら、なんの公共性もない、クライアントの意向に合わせた、金儲けのための再開発やタワマン事業が跋扈している。そう考えると、住宅空間を論理的につきつめ、そこに芸術性を凝縮させた篠原の「自由な」建築のあり方は、失われた一時代の貴重なレガシーだろう。今後、住宅が過剰供給となり、人口減少で空き家も急速に増える、建てたくても建てられない時代に、施主と建築家の自由はどのように発展していくのか。現代の「住宅論」を期待したい。（斎藤幸平／東京大学准教授）

33 住宅設計は、ある特定の施主のための一品製作ではない

『インテリア』1964年5月号、インテリア

篠原は当時の小住宅生産を、天候や人的資源に左右されやすい上に「近代的分業の悪さだけが余分についている」と批判したが、大企業が統合する生産方式には希望を見ていた。確かに当時と比べると、質が安定した現代の住宅はその恩恵を受けている。▼また、大量生産と工場生産を区別し、大量生産には理解を示しつつも距離をとり、工場による少数生産を賛美している点にも着目したい。版画とプレタポルテを例にあげ、一品であることが芸術性の条件ではないと主張はするが、生産量を限定し価値を担保することには肯定的だ。▼この生産の問題は、国家の近代化と共に現れるいわば〈量〉と〈質〉の問題である。しかしそれらが満たされていながらも取り壊される建築が少なくない現代において、重要になるのは〈時間〉への視座ではないか。遺された建築を次世代へ継承し、多世代にわたる時間を対象に建築をつくること。私たちにはその姿勢が問われている。（小田切 駿・瀬尾憲司・渡辺瑞帆／ガラージュ共同主宰）

34 未来に賭けて〈住みにくさ〉を

『世代'64』1964年2月号、学習研究社

「未来に賭けて〈住みにくさ〉を」とは文芸誌上の論争の一部で、文芸評論家・荒 正人氏からの「機能を無視して芸術はない」と物申す意見とともに掲載された文章である。ここで篠原氏の「住みにくさ」、荒氏の「住みやすさ（つまりは機能的充実）」とは当然その真意において交差するものではない。しかしあえて字義通りに併置して受け取るならば、わたしは二つの言葉を否定しない。なぜならば二つの言葉は必ずしも対立せず、新たな生命感を充足する到達点、それに対する射程の大きさの差異だと考えるからだ。ただ私個人としては、その射程をできるだけ遠くに見定めたい。そして同時に建築家の任務とは、到達点をいかに遠くへ見定めるか、それに向かって施主の足元を照らし伴走するためのしなやかでかつ強靭な筋力をいかに鍛えることができるか、ということでもあると思う。そうした手筈を整えたときに、はじめて未来に賭けて前進できるのではないだろうか。（石原愛美／プフ設計主宰、東京藝術大学教育研究助手）

35 たとえば最大限住宅

『新建築』1965年1月号、新建築社

私は大きな建築の方法として、バードウォッチングに興味がある。▼70年代、高度経済成長の波が押し寄せ、住宅開発が予定されていた都内の埋め立て地で、やがてバードウォッチングが広がり、鳥の生態を守る動きへとつながっていった。人々の眼差しのもとで、鳥たちの生態系を守る運動が広がり、住宅開発は中止された。そして、その土地はいま、野鳥のサンクチュアリとなった。▼眼差しによって大きな空間がつくられる。身体的な行為で広大な場所が設計されること。最大と最小の対立を超えた、その眼差しの先にある建築。▼そこでは建築によって人工と自然の境界が解体されて、引きなおされる。そして、その場所の歴史を引き継ぎながら、「いま、ここ」ではない現在が構築されていく。▼大きな建築は私たちの目の前で積み上がっていく風景をいったん留め、それを見つめ直す時間をつくる。そのほんのわずかな猶予を与えてくれる。（井上岳／GROUP共同主宰）

36 抽象系と人間との出合い

『新建築』1967年1月号、新建築社

それは、無機質な構造と生きた感性が交わる瞬間を指す。未来の都市は、無数の関数が織りなす抽象的な体系であり、その構造はドライで厳密なものとなるだろう。しかし、その中で人間はどのように生きるのだろうか。科学の進化がもたらす合理的な設計と、人間の持つ温もりや偶然性は、どのように調和するのだろうか。抽象的な都市構造は、人間の造形力を超えたところに存在する。それは、人間の手を離れ、自律的に発展するシステムである。しかし、その冷たさの中に、人間のための空間が生まれると信じたい。未来の住宅は、抽象と感性が出合う場所であり、そこには人間の営みが息づいているはずだ。この文章も、人間の思考と機械の計算が融合して生まれたものだ。言葉の一つひとつは、人間の感性とAIの論理が交錯し、未来への問いを形にしている。抽象系と人間の出合いは、単なる概念ではなく、私たちがこれから歩むべき具体的な道そのものである。（連 勇太朗＋DeepSeek／NPO法人CHAr代表理事）

37 空間に永遠を刻む

『新建築』1967年7月号、新建築社

設計した建築・空間が永遠に生きられることを願うのは、今も同じだ。現代の私は新築に限らず改修・転用や仮設にも多く取り組むが、建築を存続させるべくチューニングする営み、地域の持続を願い空間実践のきっかけを骨格づける試行、という意味で、永遠への志向は等しく重要である。設計を続けるほどに思うのは、機能も用途も、材料も、経済も、人の心も、それぞれ単独ではあまりに儚いということだ。それらを縫合する術を探り、固有の文脈や骨格を見出しながら、いくらか頼れる全体（空間）を物質化していくのが「建築設計」ではないかと感じている。その際に永遠を願って私

が賭けてきたのは、混沌とした全体から適切な尺度で「抽象」を搾り出し、使い手も設計者すらも超越した次元で、様々な解釈に開かれた「余白」「オープンエンドさ」を建築に託すことである。形式・幾何学は常にその手がかりであり続け、ゆえに篠原の言説・作品に、今も私は鼓舞されている。（伊藤 維／伊藤維建築設計事務所代表、名古屋造形大学准教授）

38 思想の空間

『新建築』1967年7月号、新建築社

「思想の空間」とは、空間に込められた思想が言葉ではなく造形によって具現化されたものである。それは消耗されうる「空間の技術化」を超えた、「空間の思想化」という永続性を前提とする。▼思想をビジョンと換言するならば、小さな私的空間に宿る大きな社会的意義が空間の思想であり、その思想が造形された空間が「思想の空間」なのである。▼しかし、ビジョンは種に過ぎない。思想という未完の種が共感者に育まれることによってはじめて、空間は真の永続性を獲得しうるのかもしれない。この過程で、思想は物語へと遷移するだろう。空間を受容した他者が、それを能動的に再構築することによって、「私」の思想は「私たち」の物語へと接続される。▼社会性を伴ったビジョンによって構想した空間を、空間技術を最大限活用しながら造形し、またその過程に他者を巻き込むことによって、思想の空間ならぬ「物語の空間」を私は実現したい。（秋吉浩気／VUILD）

39 人間をこえる尺度

『新建築』1967年7月号、新建築社

私は建築を体験する際に、「違う場所・時代にあって、異なる役目をもった建築としてもこの空間は成立するだろうか」ということも考えるようにしている。美術館が市場になってもいいだろうし、駐車場が住宅になってもいい。そんな空間こそが、現在を生きるためでもありながら、歴史的時間を扱える建築にもなるんだろうなと、感動した場所を前にして思うことがあり、「人間をこえる尺度」という篠原の「問い」もまた、こうした感覚に近いように思う。目の前の対象から遠く離れようとしながら、もう一度戻ってくる、そうした行き来を含めてこの言葉を用いているのだろうし、住宅というきわめて生活的で狭小な対象を舞台として「広がり」を提案するのも、そこに意味があったのだろう。そして篠原の住宅空間を、言葉や写真、図面といった「虚構」を通じてしか体験していない私にとっても十分に魅力的なのも、この「尺度」がもつ力だろう。（寺田慎平／w/（100-1-1000）共同主宰）

40 単純化のもつ力

『新建築』1967年7月号、新建築社

篠原一男の単純化には、物質的なデザインと言葉の二つがある。▼篠原一男においては、設計図の表記の中でも、単純化・抽象化を施すディテールの操作により、洗練されたコンセプチュアルな空間が実現し、アーカイヴとしてもそれを感じ取ることができる。複雑な与件を同時に解かなければならない建築設計においては、単純化していく過程で何をそぎ落とすかという決定が非常に難しい。設計の単純化は、洗練された表現へと繋がり、より建築を純化する。しかし手法を間違えると要素がそぎ落とされ、陳腐化してしまう。▼それに対して言葉は、単純化することにより人々の想像性を獲得し、社会へ普及し、広く伝達されやすくなるだろう。しかし一歩間違えれば、詳細な意味が剥がれ、浅くもなる。そして広告的なニュアンスを含み始め、忠実な伝達よりも波及性を重視した言葉遣いへと変貌する。▼単純化は、洗練と浅短の駆け引きの中にある。（津川恵理／ALTEMY）

41 およびもつかぬ文脈

『新建築』1967年7月号、新建築社

建築は、人間の生を豊かにするための道具である▼所詮物質の組合せでできている世界とそれを拠り所として生きる私たち▼全てのものが所有され、私たちの生もその波にのみ込まれた▼およびもつかぬ文脈がほしい▼ものと生のとめどない関係性を土台とし、それでも私たちの実際に生きる世界をつくりなおすことで、疎かにされた人間の生を回復するような▼そういう文脈というのは、いついかなる場所でもひとりの人間のなかから生まれてくるものだ、と篠原はいう▼説明可能性という正しさの中で、個の表現は付加価値となり、建築に内在する言語的、文化的な力は僅か▼いま共有知としての建築の力を取り戻すべきだ、と私は思う▼個と社会を行来する振り子を止め、狭間にある共を、ブラウン運動のように行き交う個々が一瞬交わる場所を、丁寧に掬い言葉と空間として表現することで、個の差異化からも社会の正しさからも逃れ、生の自由を謳う▼およびもつかぬ文脈を（アリソン理恵／ara主宰）

42 新たな虚構と現実

『都市住宅』1968年7月号、鹿島出版会

虚構とは、常に現実との対比の中に生まれる。だから現実に向き合わずして、虚構を構築することはできない。成長が謳われた社会へ応答するように、生まれては風化していくデザインを否定し、篠原一男は非日常的な虚構の空間の構築を住宅設計の主題とした。日常的な条件から解放されてこそ、人の生きる意味に迫る本質的な表現が可能になると考えたからである。同時に、現実を無視した自由奔放な表現を重視したわけではなく、篠原一男ほど真摯に現実に向き合った建築家はいない。一方、東日本大震災や新型コロナウィルスで経験したように、私たちは現実が明日には虚構になり得る不確かな時代を生きている。建築をつくることを通して、実感の持てる事物との関係を一つ一つ結び直していかなければならない。事物との関係性が見えない日常を見直すことが、人が生きる意味を考えることにつながるし、そこで生まれる表現は、現代において虚構性をはらんだものになるだろう。（山道拓人・千葉元生・西川日満里／ツバメアーキテクツ）

43 新しい〈自然〉の導入

『インテリア』1968年7月号、インテリア

テクノロジーの発展は、工学的制御性の絶え間ない向上を刻んだ歴史といっても過言ではない。近年、デジタルファブリケーションやロボティクス、AIの著しい進展も、この趨勢をさらに加速させている。しかし、複製可能な機械製造の空間や、あらゆる要素が統御された場に永遠性は宿るのか。むしろ、不確かなものに接続して立ち現れる空間にこそ、人は心を揺さぶられるのではないか。自然環境や自然素材、敷地のコンテクスト、既存躯体などの制御不能な存在と格闘する潮流は、それらがもたらす不可思議な魅力を本能的に知っているからだ。篠原一男のいう「新しい〈自然〉の導入」とは、抽象化された建築のエレメントを自然環境と反応させることで、工学を越えた空間性を創出させることを意図したのではないだろうか。自律性の追求の観点からみればアンビバレントにも映るが、他律的な存在と共生を許容できる建築が、空間へ永遠性を刻むことができるのではないか。（鈴木淳平／PONDEDGE）

44 情念を含んだ機能

『デザイン』1970年10月号、美術出版社

どうしてその土地で生きていくことを選んだのか、そしてこれからどのように生きていきたいのか。▼私は、建築という出来事は、このふたつをあきらかにしていく過程にこそ価値があると考えています。▼「情念を含んだ機能」とは、1970年の大阪万博に関わった磯崎 新と、住宅ばかりを設計している篠原、対比的なプロジェクトに向き合う二人の対談の結びとなった言葉です。広場と住宅は、ともに設計することが最も難しいと語られますが、どちらも鍵になるのは、その場に情熱をもって参加する人間を醸成することは、建築には可能なのかという問いです。▼その対話から50年の時が経ち、いま議論の中心にあるのはやはり人間です。俯瞰した建築論ではなく、個別具体、色とりどりの人間の人生から解きほぐして、熱のある個から集合までをシームレスに描いていくこと。やはりそのさきに、私たちが参加したいと思える、確かな未来があるような気がしています。（冨永美保／トミトアーキテクチャ代表）

45 非日常性の構築

『建築文化』1971年1月号、彰国社

篠原にとっての創造とは、非日常的なものをつくり出すことであり、日本の伝統の日常のなかにあった土間や屋根を、象徴空間・意味の空間として主題とすることが起点になった。が、その後「未完の家」「篠さんの家」（ともに1970年）という二つの住宅を通じて、日本的空間の意味を消す姿勢に変貌する。屋根を支える丸太柱と主要な壁面の正体写真1枚で空間全体を記録した「白の家」（1966年）に対し、二つの家では抽象的で厳格な幾何学の中で、スカイライトの光という現象で断片のみを示し、不確かさ・多様性を指向した。二つの家の発表から50年が過ぎた今、私にとっての非日常性の構築とは、正しさだけに支配されない直感的な体験と共にある。風景・来歴と連続することによって一言で表せない複雑さをもち、かつ、のびやかな働きをする立体への指向が創造の中心にある。建築のサイズを超えた広がりをもつ立体と人間の身体のダイレクトな関係の構築から、未知なる合理性を探り当てたい。（中川エリカ／株式会社中川エリカ建築設計事務所代表、慶應義塾大学大学院専任講師）

46 閉じられた系

『建築文化』1971年1月号、彰国社

篠原の作品は、サッカー場のようである。サッカーの試合における選手の動きは、彼らの周囲の行動を促す側面によって導かれる。実践的状況の特定の特徴は、動きの機会を提供するものとして把握される。これらの行動は自動的であり、明示的な自己意識を欠いている。その存在は流れを乱すだろう。そのような意味で、フィールドは私たちの意識のためではなく、行動のために存在する。これは私たちが代謝の継続的な機能を通じて時間の経過とともに形態と構造を維持する、複雑な物理的システムであることの結果である。私たちは物質を単に通過させるだけでなく、自分自身の原理に従って変換する必要がある。環境へのこの依存は、それとの絶え間ない相互作用の中で行われ、全体を再確立し、自分自身の外側にある中心を再創造する。篠原の作品はこれの最も明確な例の一つであり、生物が環境の特徴を統一体として制御するために神秘的な仮定を必要としないことを示している。（Steven Schenk＼Schenk Hattori / Schenk.zone, Director）

47 亀裂の空間―連続のための遮断

『建築文化』1971年1月号、彰国社

獲得したいある状況があったとして、そこにはそう見えるのとは真逆の性質をもつ一面やそこに至る奥行きまでもが含まれていると思っている。明るさの中には暗さが、優しさの裏には憤怒が、繋がりのどこかには分断が。何かを一面的に捉えずに見るために、逆説的な事象を据えることでそのものがもつ異なる面や含まれる奥行きを見過ごさないでいようとする慎重さがほしい。その時、白と黒のような対立的な構図ならば緊張感が、奥行きとして間も含んだグラデーショナルな状態として捉えるならば対話が生まれやすくなるのではないか。ある状態は良くも悪くもそれと相対する状態へと至る途上だとすれば、その途上の幅のどこかには自身の実感が伴うフェーズが存在する可能性が高くなる。個人の眼差しを閉じた内向的態度として切り捨てることなく、その視野内に他者との接点を希求し、否定的事象を覆す力を言葉と空間に宿すために、世界をグラデーショナルに見ていたい。（湯浅良介／オフィスユアサ主宰、多摩美術大学准教授）

48 不確かさの表現

『新建築』1971年1月号、新建築社

2018年晩秋のチューリッヒ。図書館の返却デスクに無造作に並べられた、多様な篠原一男作品集に目を奪われた。噂にきく篠原の国外人気とその謎が突きつけられた瞬間。以来、篠原の国外受容の問題が私の世界史研究の大きな宿題として残りつづけている。▼内と外それぞれに対し隠すものを塩梅する情報の妙手。「不確かさの表現」とは、そんな彼の「あえて知らせない」情報遮蔽の美学か。国内では独自の伝統論にこだわり、その永遠性の名のもとに国外の存在を眩ます。その陰には、戦後いち早く国外向けの別様の自己宣伝に舵を切った半身が隠れる。▼「伝統というものは民族の共通の財産であるという本質によって、もし、伝統への対応が正確であるならば、確実なるものとして考えられるはずである」。日本人向けのその前提の裏腹、仮定の裏腹、民族的自我の裏腹に、篠原のクリアカットで断定的で、決然として幾何学的な「不確かさ」を解読する手がかりがある。（江本弘／明石工業高等専門学校准教授）

49 新陳代謝を部分として

『新建築』1971年1月号、新建築社

この言葉の章には、建築家としての空間を中心に据え、周りにある機能を部分として新陳代謝させる事が書いてある。腑に落ちる一方、中心になるのは空間に限らず、部分には変わらぬものもあると思う。私たちの住宅改修の一つでは、中心に躯体と円卓を兼ねた家具を置き、部分として住み手の記憶に残る光環境や既存壁などの変わらぬものを取り入れた。重要なのはそこに上下関係はなく、全体としてもたれ掛り合う関係である事だった。▼新陳代謝は、過去や未来を含んだ現在の持続そのものである。それは絶えず部分で起こり、全体は常に開かれて変化し続けている。私たちは新築と改修の試行を往き来する中、空間がフラクタル的に持続するものだという経験をしてきた。建築は場所や人と共にあり、ものづくりの合理性から離れたところにある、人の情緒と活動との関係を再構築することに意義を感じている。新陳代謝を部分として、全体へと向かう感覚を掴んでいたいと思う。（塩入勇生＋矢﨑亮大／ARCHIDIVISION）

50 住宅は建築の集中表現

『新建築』1971年1月号、新建築社

例えば私は住宅のことを考えるとき、まず母のことを思い出します。ハウスメーカーによる90年代の輸入住宅である私の実家には、家族の中で母のための部屋だけがありません。それは「母」への見えない抑圧か、それ以外の全てを彼女の領域とする母権的な形式なのか。あらゆる建築の原型としての住宅が50〜60年代のモダニズムに戦後の封建主義への対抗として存在していたとして、今この時代に実感とともに言えることがあるとすれば、私たちは今も制度へ衝突し、また私自身は建築の巨大さに圧倒されたままであるということです。

20年以上暮らしてきた家のことでさえその衝突の中から抜け出せないことに、建築の「大きさ」を改めて感じます。篠原が1972年の新建築住宅設計競技の審査員として「あなたの内なる〈住宅〉」を求めたことを踏まえれば、まさに「内なる〈住宅〉」はすなわち「内なる〈葛藤〉」として、建築全体に翻って向かってゆくのだと思います。（成定由香沙／Studio Yukasa Narisada主宰）

51 数学的都市

『篠原一男 16の住宅と建築論』美術出版社、1971年

都市とは常に変動し続けており、その全体像を完全に把握することは困難である。その実態は複層的であり、空間や時間さえも横断するような様々な要素が複雑に絡み合い、ネットワーク状に構成されている。一つ一つの結び目を丁寧に紐解いていくことで、少しずつその関係性が明らかになっていく。だがそれでも断面的であり、その輪郭は朧げである。▼篠原氏は、個々の住宅と巨大な都市構造との間には不連続性があることで、住宅の具体性と都市の有機性や機能性が保証されると主張する。だが一方で、切断と連続を孕んだ、両者を切り替えるトランジスタのような両義性をもたらす要素も持つべきではないだろうか。都市は抽象的であると同時に、具体的な部分空間を持つ。それらは生きた紐帯によって生じる情念の空間である。抽象性と具体性を行き来することで、都市の断片をも包含することが可能となり、その空間はより生々しい実体を獲得できるのではないかと考える。（石飛亮／WANKARASHIN）

52 はじめに全体があった

『新建築』1972年2月号、新建築社

民家集落調査において集落全体をはじめに網羅的に調査することによって、その民家や集落の構造を掴むことができるという意での言葉ですが、それ以上に想像力を掻き立てるものでもあります。一般に〈全体〉は有限で明確に区切られたものと捉えられがちですが、ここでの〈全体〉はひとつの円で囲み明確に定義できるものではなく、絶えず多様に拡がり続けるものだと私は考えます。それは、まるでキノコのように、時には群生し、時には胞子となって別の場所へ広がるようなものと言えるかもしれません。その拡がりは私自身の想像力に依るものであり、一方で一個人の力だけでは限界があります。他者との協働こそが、〈全体〉をさらに拡張する手段のひとつだと考えます。はじめに可能な限り広い、あるいは拡げた視野で〈全体〉を捉えた上で目の前の状況に向き合うことで、結果的にその目の前にある事象の射程が広がっていくのだと思います。（土井 亘／ドットアーキテクツ・パートナー、京都市立芸術大学特任講師）

53 連続への触手

『新建築』1972年2月号、新建築社

連続への触手は、生活する個人の姿や、隣接する建物との間に生まれる固有の「とある関係」をつくるためのかたちである。そして「とある関係」とは、その建築を取り巻く社会である。▼連続への触手は、例えば、ある建物の玄関では、建物の外観、扉のかたち、ハンドルの握り心地、地面の仕上げ、敷居を跨いで見上げた時に見える景色など、さまざまなスケールで断片的なものだが、経験としてはひとつづきに連ねていくことができると考える。しかし、設計者が物理的に設計できる触手の範囲に制限はある。だからその射程距離を伸ばすため、街を観察したり、ときに幾何学や哲学的思考を取り入れたりすることで、その建築に訪れる人や見聞きする人の想像の触手に触れたいと願う。その触手が、戦争など遠い国の社会まで及ぶことができるかはわからないが、人間の触感と想像の力を信じたい。（板坂留五／RUI Architects）

54 直撃的に全体を襲う

『新建築』1972年2月号、新建築社

はじめに、文字の並びから内容を推察してみると、「魅力的な建築には、明快に全体を説明できてしまうコンセプトが内在する」。▼次に、この言葉が見出しの文章を読んでみると、その結びには「小さな空間ではディティールよりもストレートで直裁な表現が全体を支配しているほうが迫力がある」とありました。▼当たらずも遠からずですが、ここで語られている4作品の主題〈亀裂の空間〉からは、むしろ繊細で執拗な印象を受けていたので意外でした。▼使われている単語をみると、「直撃」はダメージを与えるイメージ、「襲う」は暴力を連想する攻撃的な表現ですが、ことさら強烈な言葉を選んでいるのは、「全体が説明されてしまうことの是非」への葛藤が垣間見えている気がします。▼この言葉のことを考えているうちに、部分と全体、明晰と曖昧、シンプルと複雑、平凡と極端のどの点を貫くのが良いのか、そういえば日々揺れているな、と気付かされました。（千田 藍・千田友己／千田建築共同主宰）

55 空間に新たな知と情を

『新建築』1972年2月号、新建築社

現代の日本建築は、消費財になり下がり、線は少なく、それにより何も語らない部分が増えた。私たちが生きる複雑な世界はひとつの建築、ひとりの人間が説明できるほど単純な創作であってはならない。知が時間や歴史から得られる叡智だとすれば、情はそれを持ってして各自が描く信念の表出だと考える。▼人間中心社会に対する反動が倫理観として現れ、このテーゼは何度も覆されてきたが、同時に私たちの生き方や暮らしを見直す機会を得ている。ただし人間以外を慈しむ心も重要だが、人間あるいは自身に対する信念が無ければ世界での存在は閉ざされたものになってしまう。信念が社会と衝突する時、建築の新たな表現が生まれるのだろう。▼篠原が語る〈新たな知と情〉は社会通念に信念が相剋した状態を期待しており、自身の言葉と空間の結実であった。それが建築家に永遠の夢を与える。私たちの建築がそれをつくりだすことができるのか、考えてみたい。（石村大輔・根市 拓／Ishimura+Neichi）

56 非合理都市と空間機械

『新建築』1975年3月号、新建築社

「都市こそほんとうの空間機械」。この言葉から思い出される風景たち。▼集合住宅の林立するアンマンの丘に、大きな力で嵌め込まれたローマ劇場。そこに座ってタバコを吸っていた、暇そうな二人の青年。古代神殿の柱を彫り込んでミフラーブにしてしまった、ルクソールのモスク。先祖の残した装飾をセメントで再現する、東チベットの農民たち……。過去のかたちに意味を見出し、どうにか積み重ねていく。人間がそれぞれ意味を見出す生き物である限り、都市はやはり合理的にはなり得ない。▼「空間機械」は、そこここにある。建物で溢れかえった現在、その言葉は、僕たちの周りの過去のものたちへの眼差しに、示唆を与えてくれる。古い日本家屋に住む。この場所で床に座っていた、過去の人々の声を想像する。弥生時代の床、東南アジアの床。過去のかたちを少しだけ背負って、生活を変えてみること。人間が繰り返し住んできた場所で、引き続き暮らすことの楽しさ。（田熊隆樹／マンライスタジオ主宰、早稲田大学非常勤講師）

57 共時都市

『新建築』1975年3月号、新建築社

「共時都市」とは、異なる時代の価値観、構築原理、生産様式が異種混交した都市の状況を示した言葉である。例えば、ローマにおける古代遺跡とバロックの放射状街路と現代のスーパーマーケットが混成する様である。異なる時代の交差を肯定するならば、一つの帰結として、現世代の人々は新しいものを創造すればよいという考えが導かれる。しかし別の帰結として、現世代が過去のやり方に立ち戻ることもまた可能である。都市の変化は、しばしば大資本による破壊と構築によって進められる。現世代が過去の世代を押し退け、都市を造った後に、次の世代がその痕跡を消す。このような世代の隆盛による破壊と構築は、近代の投機的論理と進歩史観によって加速されてきた。だが、私たちはこの流れに抗い、共時都市を再解釈するならば、それは、死んだ人々の痕跡を辿ることであり、さらに時を遡り、人間以前の生命の歴史や惑星尺度の時間を都市に交差させることである。（能作文徳／能作文徳建築設計事務所/HOLES、東京科学大学准教授）

58 私の都市は〈まなざしの都市〉である

『新建築』1975年3月号、新建築社

歴史的な建築や遺跡に憧れを抱きながらも、何気なく立ち寄った土地の生活がつくりだす光景に新鮮さを感じてしまうのはなぜだろうか。旅先で偶然出会う強烈に焼き付いた光景を、篠原は〈まなざし〉という言葉で捉えようとしている。例えば、マチュピチュを訪ねた際に立ち寄った古代インカの都クスコで、何千年も前の石積みの壁に子供たちが寄りかかって遊んでいるのをみたとき、絶えずそこにある場所と人々の生活が織り成し組み立てる舞台のような風景を眺めたと話す。その場にいたのはほんの一時であるにも関わらず、長い間眺めていたかのような定点観測的視点は、都市や建築の設計で大きな意味をもつ。わたしたちがつくる建築が、匂い、声、空気などをまとい、生きられる空間として絶えずそこにあり続けられるように、メディアを介さずにみる自分だけの〈まなざし〉を信じてみたい。（福留 愛／iii architects 共同主宰、東京藝術大学教育研究助手）

59 裸形の空間

『新建築』1975年10月号、新建築社

私にとって「裸形の空間」とは何か。▼それは両極化した抽象と具体が並存し、その間に大きな隔たりをもったまま凝結された空間であると私は思う。▼空間にまとわりつく余分なものを削ぎ落とそうと、抽象化を煎じ詰めていくと、表層が裂けて骨格が露になる。むき出しとなった骨格は、遥か昔からそこにあった物のように、あるいは別世界から突然現れた物のように、生々しく確固たる具体としてそびえ立つ。▼抽象と具体を、序列なく独立した存在として、互いに大きなずれを孕んだまま衝突させる。両極のせめぎ合いによって、その間には意味が宙づりになった空白が生まれる。抽象と具体の狭間に生じる空白は、常に満たされることのない自由のための器となる。▼どこまでも、存在意義を問い直せる余白、すなわち無限の自由の可能性が「裸形の空間」にはある。抽象と具体の極度な拮抗状態こそが、「永遠性」の受け皿となるのではないだろうか。（竹内吉彦／tデ主宰）

60 第3人称の横断

『新建築』1975年10月号、新建築社

子どもの頃、車の窓から、高層ビルの隙間を縫って一羽の大きな鳥が悠々と飛んでいく光景を見たことがある。「第3人称の横断」という言葉から、その風景を思い出した。人間にとっての第3人称として、他生物という存在がある。都心ではその気配はほとんど感じられない。きっと、意図的な排除をつくってきた結果、他生物たちの居場所がいつの間にかいなくなってきたのだろう。そもそも他生物を漠然と第3人称としてとらえることが問題だったのか。私たちの周囲の生物たち、それらの暮らしを知り、「彼ら」と「私たち」の暮らしの間に、持ちつ持たれつの相互補完関係が見つけ出せれば、他生物は、「私」と「あなた」つまり第2人称としての「相手」にようやくなれるのかもしれない。都市に多様な生物が行き交う風景に、私たちは再び出合えるだろうか。（武田清明／武田清明建築設計事務所）

61 相反性の力学

『新建築』1977年1月号、新建築社

設計は決断の連続であり、そのほとんどがアンビヴァレンス（相反性）なものだろう。構造設計では、建物の安全性を第一にして決断はされていくが、構造設計者は（構造）力学を用いて建物に生じる自然現象を解き、安全性を判断する。力学は不変なもので、条件を与えると解が導きだされる。したがって、構造設計者は力学に対して従順であるとも言え、力学を通して自然にお伺いを立てているとも言えるだろう。▼しかし、構造設計者は従順なだけではない。力学を駆使することで、解をコントロールすることが可能になる。材料や部材断面、荷重に座屈性状など、力学に影響する全てを操作することで、解をリードすることができる。▼力学による構造的な合理性が、建築的な美と一致しないことは古くから言われてきたことであろう。構造設計者は安全に対する信条と、自らの建築観を実現するために研鑽を重ねる。構造設計者にとって、力学とは規準であり武器である。（岡山俊介／金箱構造設計事務所）

62 野生の機械

『SD』1979年1月号、鹿島出版会

地球環境危機の中、建築の役割が再考される今、篠原一男の「野生の機械」は新たな示唆を与える。篠原にとって「機械」は、精緻な構成を持ちながら固定された機能に収まらず、新たな意味を生み続けるシステムである。「野生」は、環境と結びつきながら建築に作用し続ける力を指す。「野生の機械」とは、この二つが拮抗しながら共存する建築の在り方を示す。▼この概念を読み解く上で、同じ戦後高度成長期に対照的な建築観を示した池辺 陽との比較は有効だ。池辺は、社会性・技術性を重視し、機能を空間の働きと捉え、それを鍛えることで建築の質を高めると考えた。一方、篠原は、芸術性・批評性を重視し、機能で捉えきれない余白が不可欠とした。しかし、池辺は「人間は変化のプロセスを持つ」と述べており、建築を環境や人間との関係の中で変化し続けるものと捉える点で両者は共通していた。この視点は、価値観の転換が求められる現代、一層重要となるだろう。（川島範久／明治大学准教授、川島範久建築設計事務所代表）

63 無調性の反復

『SD』1979年1月号、鹿島出版会

様々なことに大らかさが求められる現代にも重要な問いである。「満寿美公園」（2022年）で私たちは、通常計画されるべき遊具の代わりに盛土で傾斜面を用意する土木的操作だけで、子どもの遊び場とみまもる居場所を設計した。一般的な公園のように遊具で調整された利便さよりも、無調整にもどのような利用がされるかも分からない斜面の方が、子どもは無邪気にも遊んでいた。土木的思考にはそのような性質が多分にあり、時にこの大らかさに助けられている。▼街でも無調性は反復している。建築はその大らかな環境に連続するように、調性と無調性の間を取り次がねばならない。ワークショップなどを通して目の前の地域課題や要求に対峙し丁寧に応答していくような、近年主流とされる「調性の建築」の手法も必要である

が、これらが時には翻って不自由さや窮屈さをもたらすことを鑑みると、むしろ人と建築の関わり方を解放するような無調性に学び、これからの建築を作りたいと思う。（岩瀬諒子／岩瀬諒子設計事務所主宰、京都大学助教）

64 まだ定義されていないことば、機能

『SD』1979年1月号、鹿島出版会

「永遠」とは、時間軸と空間域における、大なり小なりの反復運動である。時はその秒針を刻み続け、宇宙空間は、深く、大きく、呼吸し続ける。反復が行われる限り、「永遠」は存在する。その反復運動に参与するため、人は反復作業（積み、並べ、組み、叩き、塗り、削る）の果てにあるもの＝建築をつくる。▼篠原一男の建築もまた、反復の渦中にある。暦、時計、書物の役割を担った古代建築や、信仰、芸術の対象として扱われた古典建築といった古の営みに呼応し、現代的かつ間接的な表現でもって、都市の中に、あるいは郊外の森の中に、幾何学的な囲いとしての空間を具現化する。歴史の中で反復する建築は、過去との共鳴関係を生み出し、後世へと紡いでいく「機能」を果たす。▼建築と呼ばれる全てのものに共通する普遍的な「機能」があるとするならば、漂い続ける歴史空間を生け捕りし、現在と未来に解き放つための装置（機械）ということになる。（大室佑介／大室佑介アトリエ主宰）

65 都市と住宅は、私の場合、独立事象である

『建築文化』1980年5月号、彰国社

「私の場合、」というあたりに、1980年当時の都市の混沌やノイズとの向き合い方への明確な意志と前時代への決別を感じる。住宅と都市の関係をあえて切断することで都市の原石を住宅の中に見出そうとする篠原の潔い姿勢は、安易に繋ぐことから発想しがちな現代の建築をとりまく状況からみると、むしろ新鮮に映る。たしかに都市を住宅のアナロジーにしたり、デザインのための方便として用いたりすることに関しては私も賛同しないが、しかし、80年代の都市にまだ残っていたであろう混沌と不確実性が渦巻きつつも何が起こるか分からない面白みを湛えていた都市の魅力は、現代においては完璧に管理され予定調和な消費の場として封じ込まれてしまった。圧倒的多数の住まいが個室群に細分化され、都市や地域と切断されきった状況においては、どうしてもそれらを再び直接つなぎ直す仕事をしたいと思う。都市と住宅は、私の場合、連続事象である。（宮崎晃吉／HAGISO）

66 見えない機械

『新建築』1981年9月号、新建築社

この言葉は、超高性能にもかかわらず、無造作に作られた戦闘機の写真とともに紹介され、近代主義建築が命題としてきた「機能と形の素朴で直線的な対応関係」が解体された、今日の技術と都市を表すメタファーとして用いられた。人間のために発見・創造されたはずの機能主義が形骸化し、機能と空間が分離して、機能という概念だけが独り歩きする戦後日本の近代主義建築に対して、篠原は新しい機能主義に向かおうとした。▼私の建築の実践や研究のテーマであるケアの場は、医療・福祉の近代化や制度の構築に伴う機能主義の考えと切り離せない。しかし、機能性や合理性と同時に、人間性の回復が求められる場でもある。生きることの意味を産み出す空間、人間生活と呼応し合い、非合理とされる情念や感性を喚起させる芸術としての空間を追究した篠原の作品や思想は、住宅のみならず、生きることに直接的に関わるケアの建築にも必要な視座を与えてくれる。（岩田祐佳梨／筑波大学芸術系准教授、NPO法人チア・アート副理事長）

67 プログレッシヴ・アナーキィ

『新建築』1981年9月号、新建築社

篠原は、80年代の東京で都市のカオスに美を見出した。▼初期モダニズムの時代のストリームラインの船舶のような統合された全体像を目指すそれではなく、月着陸船のように精密な部分が組み合わされた不細工な集合体。篠原はその当時のあり得べき空間様相を、機械をアナロジーに用いてこのように説明する。▼メガロマニアックな統一性よりも、事物に内在する論理のドライブを肯定すること。都市における全体と部分のヒエラルキーを逆転させる革命宣言こそが、〈プログレッシブアナーキー〉だったのではないか。このような〈部分の逆襲〉は、我々が拠点とするサイゴンの今にも見てとれる。▼急速に発展するベトナムでは、巨大開発の陰でしたたかに人々が使い倒す無政府的＝アナーキーな空間が生き延びている。しかし2025年のそれは、ウェットな隣人関係からSNSまで見えないレイヤーが被さった、機械というより有機物のような様相を呈し始めている。（山田貴仁・犬童伸浩／studio anettai）

68 歴史の幕間

『新建築』1981年9月号、新建築社

歴史という減ることなく増え続ける大きな波について、日々設計しているときに意識することは少ない。ただ小さな歴史、たとえばその土地の歴史、用途が持つ歴史、施主の歴史は、必ず意識して設計している。▼歴史は寛容で、続けているとそれも流行から慣習、伝統になることがある。建築形式の移り変わりを舞台に例える篠原に言わせると、歴史を表象的に取り入れるだけでは幕間劇にしかならない。幕間劇だとしても、突き詰めると狂言のような伝統になることもあると思うが、続けるものがいなかったということは、歴史の舞台からは降ろされたということかもしれない。▼一方、この頃はまず歴史の舞台に立とうとする人が減っている気がする。篠原が幕間劇と呼んだ潮流に対する、ある種のトラウマかもしれない。大舞台につい怯んでしまうが、建築を建てる以上避けられないとも思う。幕間劇になることを恐れず、自分たちの世代なりの主題を持って舞台に上がりたい。（平井未央／iii architects共同主宰）

69 零度の機械

『新建築』1981年9月号、新建築社

水は、氷や水蒸気といったように、環境・外的条件との関係性によってその様相が変わる。そして、雲や雨、雪、霧など、天気・気候という地球環境の状態として現れ、海や川といった地形との関係による状態としても現れる。それらに人間の歴史が重なり、太平洋や瀬戸内海など、固有の意味とかたちとの関係性が生まれてきた。原子結合でしかないH_2Oの様相はその状況での関係性自体でありながらも、それ自体が固有性を帯びる純度を持ったストラクチュアであり、それを生成する構造が内在している。私にとって「零度の機械」とはそのようなものであり、様相を変え循環の中に現れ、永遠性を帯びるとともに、その根底に個に内在する強い衝動によって生まれることでのみ、固有性を帯び現れる。それは建築という物質とストラクチュアを得ることによってのみ時間軸上に現れる質のものであり、そうであってほしいと願う。（南 俊允／南俊允建築設計事務所代表、横浜国立大学大学院Y-GSA助教）

70 名前と国籍が明示された機械

『新建築』1981年9月号、新建築社

「ローカル・メソッド」と私が勝手に呼んでいる、次のようなデザイン論を思った。ある手法やデザインが、ある場所では抜群に力を発揮するが、ある場所ではからきしダメ。そんな場所に強く依存する建築を生む方法である。▼それは、ヴァナキュラーとは異なる。その場所で手にできる材料や技法で最大限の機能を発揮するのをヴァナキュラーとするなら、それは与えられた環境への適応である。他方、ローカル・メソッドは、ユニバーサルな科学技術やデザイン言語であってよい。大事なのは、与えられた環境との相性で、それを見極めて選定すれば、そこならではのデザインになる。万能ではなく、ムラのある機械をつくるイメージである。▼もちろんこれは篠原が意味した機械ではない。だが、機械との類比で建築に革新を生んだモダニズムを、同じく機械との類比で乗り越えようとする篠原が示した「普遍だが多様、もしくは混沌」と呼べる建築観に、私の機械もつながっている。（林 憲吾／東京大学生産技術研究所准教授）

71 あの優美な仏像たちをF-14戦闘機にのせてみたい

『新建築』1983年1月号、新建築社

不謹慎さとその不協和音に逆撫でされる高揚感。レトリックが独り歩きする詩的な表現の背後には、今日的な問題が潜んでいる。仏像を戦闘機にのせるという表現は、断片的全体性による新たな建築の姿をほのめかす。篠原が「幕間」と呼んだポストモダン期からもうすぐ半世紀経とうとしている現在、時代や地域を横断する要素の並置は今や常態だ。▼私たちは今、形式を軽々と乗り越え、出揃ったメニューを面白がって自由に使いこなす。ブラックミュージックの影響から生まれた東洋のファンクを、今度は欧米のバンドが参照するような軽快さを愛している。こうでなくてはいけない、を切り拓く力は歓びだと思う。しかし一方で、SNS上で切り取られる建築のパーツは、節操なく無限に組み合わされ、無神論者が席巻する世界は無法地帯と化しているようだ。今必要なのは、さらなる混乱を遊びつくす瑞々しさか、はたまた惑わされない信仰か。篠原の予言の先を、考えている。（有井淳生・入江可子／アリイイリエアーキテクツ共同代表）

72 快楽の生産性

『新建築住宅特集』1985年秋号、新建築社

建築表現の主題としての「快楽」の役割に着目した特集の中で篠原は、正統的な文脈や過去の記憶に囚われない、直喩的で無記憶の快楽が、開放性を伴って自身の家具デザインとメトロポリス論において具体的に機能していると述べた。直喩の快楽・無記憶の快楽は、その発想自体が無根拠で楽天的、ときに唐突でさえあるが、それは従前の認識や意味作用などのしがらみを解き放つという点で生産性を有する。「建築の主題としての」という但し書きに、建築の批評性と自律性への強い意識を感じる。主題としての快楽は戦術として有効か否か、生産性という言葉で測るのはそのためだ。その厳密さをもって近づける永遠なるものに私も憧れを抱くのだが、空間に永遠を刻むと言うとき、空間の範囲はどこまでか。私にとって、それはきっと物理的な建築の輪郭に留まらない。楽天的な快楽主義による特殊解が周囲を活性する効果を生むとすれば、それは有効な戦術たり得そうだ。（宮城島崇人／宮城島崇人建築設計事務所主宰）

73 無記憶の快楽

『新建築住宅特集』1985年秋号、新建築社

「無記憶の快楽」は、1985年当時の渋谷駅前の雑踏風景を指して、その〈薄っぺらな皮膜、2次元空間の無秩序（アナーキー）〉に快楽を見出すというメトロポリス論である。〈無記憶〉は、その極度にカオスな風景が、生活する人々に何の記憶も強制しないことを指す。▼時代の様相から建築主題を抽出し、建築をその表現対象だと真正面から言う時代であった。ヴェンチューリの「装飾された小屋」と符合するように近代を、すなわち自分自身を乗り越えようとした建築家の気概に、僕は恐れ多くも気恥ずかしさと羨ましさを覚えてしまった。▼経済的ナショナリズムが色濃く見え、パレスチナやウクライナでは記憶を強制するような出来事が日々起こっている。いつの時代も「記憶の苦難」と呼ぶべき様相に溢れている。▼僕らは、何かを乗り越えるのだろうか。（海法 圭／海法圭建築設計事務所主宰）

74 モダン・ネクスト

『新建築住宅特集』1988年3月号、新建築社

モダニズムの第1幕、ポスト・モダニズムの幕間劇に続く第2幕として篠原が提唱した「モダン・ネクスト」の基本作業は、「生活をめぐる大文字・小文字のテクノロジーとクールにかつ柔軟に対応しながら、そのゆらぎやノイズの中から、新しい関係の束を引き出す」ことである。2019年から取り組む里山再生活動では、小文字のテクノロジーの積み重ねの中で、人以外の主体との掛け合いの中に生まれるゆらぎやノイズから関係の束を捉え、その更新を試みている。茅葺屋根復活に向けて、休耕田に鍬で排水路を掘りススキ原にしようとしたが上手くいかない。しかしその隣の休耕田には手を入れずともヨシが群生し、野焼きするだけで茅が得られる。資源の入手条件は人間のみでなく、植物や地面が発揮するテクノロジーとの関係の束から決定されている。これを引き出し、ときに私がゆらぎながらデザインする。第2幕モダン・ネクストの終幕と第3幕の幕開けの舞台は農村である。（平尾しえな／東京科学大学助教）

75 大文字の建築としての小住宅

『新建築住宅特集』1988年3月号、新建築社

小住宅を通して、少し先の良いなと思える建築をみせること。我々も、建築一般とどのような関係を持ち得るかの確認をしている。戦後の大量に住宅供給が必要だった時代と異なり、今後の日本は空き家が溢れる。効率化を図るため、建築の施工は分業が進んだが、その必要がなくなった時に別のつくり方があると感じ、施主参加型の家づくり、場づくりをはじめた。プロセスを共有することで、クライアントが家づくりに関わる接点を増やし、長く愛される住宅をつくることを目指している。これは、住宅に限らず、みんなの場所をみんなでつくるような建築があっても良い。新築引き渡し時が完成ではなく、参加への余白を残した建築があっても良い。小住宅を通じて試みたことを、次の新たなプロジェクトに適応する。純化させながら、展開することが大事なことだと思う。（中田理恵／中田製作所）

76 世界のなかでもっとも大きな村

『建築文化』1988年10月号、彰国社

篠原は、東京を「世界の中で最も大きな村」と呼んだ。そもそも人間が群れをつくる動物だと考えると、人が集まって生まれた村は自然な状態であると考えられる。そこには顔見知りの関係があり、声を掛け合って支え合う、という初源的な人間の状態がある。篠原の言うように東京を村だとすると、近代においては「会社」がその役割を担ってきたのだろう。だが、東北の小さな村から東京に来た僕には、自然状態としての村を感じることはできなかった。終身雇用の崩壊、ワークライフバランスが叫ばれる昨今の社会情勢においては、東京が会社という村を単位とした大きな村だと言い切るには限界が来ているように思う。現在、東京には会社に変わって、小商いのイベント、公共空間の社会実験など、新しい村が生まれている。街並みは劇的には変わらないが、こうしたサードプレイスがつくりだす交わりの中に、新しい大きな村の風景の可能性を感じている。（工藤浩平／工藤浩平建築設計事務所）

77 ランダム・ノイズ

『新建築』1988年10月号、新建築社

人間は政治的な動物である。▼私たちは、自ら望む社会のあり方や、環境との関係性を、良心に基づき選択できる唯一の存在だ。▼世界は意思に満ち、何一つ偶然に起こるものはない。石が存在するのには理由があり、風は意志を持ち、木片は何かを語る。▼人間はそれをランダム・ノイズと捉え、自然の混沌の秩序の中に美を見出す。だが人間が創造するものは違う。それは純粋な選択の結果であり、明確な意志の表れである。そこにこそ、人間が人間たる起点があり、関係性の政治的構造が生まれる。▼建築は道具である。▼それは、感性と実践の意図が交錯する、物質的かつ非物質的な要素の集合体だ。願わくば、永遠には至らないように、建築は常に試行をやめず、生きたプロトタイプであり続ける。▼我々は、あらゆる生命が共存する可能性の体系の中にある喜びを表現したい。環境は決してランダム・ノイズではない。それは、関わるすべての存在が織りなす、繊細な対話の積層なのだ。（Heresbach Mélanie and Renauld Sébastien／2m26、訳：中山 慶）

78 様式を変えるとき

『建築文化』1990年3月号、彰国社

様式への着目は、「人間精神のきびしい象徴化」という日本特有の文化の再評価から始まった。この不可解で不思議な力を持ったものに惹かれた彼は、日本建築の伝統＝民族の様式と作家個人の様式の「激しくそして苦しい対応」として美しい住宅を生み出しつつ、その危険性にも触れた。「様式が完成し、その社会の新しい財産として書き加えられれば、もうその生命は終了する。このあと成長することのない様式というのはここでひとつの形式に変質してしまう」と。▼このことは、人間の体内を巡る細胞が常に新陳代謝して生命を維持する働きと同義であり、形式化とは癌化の比喩にも取れる。様式が固定化し更新されなければその社会が、建築が、作家本人が死んでしまうという警鐘である。様式を変えるとき、それは自身がそれ以前の自分を破壊し、新たな生、すなわち創造する喜び、生きる喜びを得るための「再生の瞬間」であったのではないだろうか。（百枝 優／百枝優建築設計事務所）

79 カオスを含んでラショナル

『新建築』1991年5月号、新建築社

まちに建つガソリンスタンドをぼーっと眺めていると、人と機械の生み出すシンプルで変化に富むリズムを感じる。▼屋根の下を車が来ては去っていく風景は、工場のベルトコンベアがつくる単調なそれとは似て非なる。たっぷりとガソリンを入れて窓を拭く人もいれば、ササっと済ませる人もいる。「給油」という単純な行為であっても、人間による活動が風景にリズムを作ったり乱したりする。▼そして、この建築は完全に開かれている。大小様々な種類の車が利用でき、街行く誰もがその様子を眺められ、人や猫や蝶々が屋根の下を通り過ぎていく。そういった様子は、大きな屋根と中心付近に一列に並ぶ柱という構成によって作られている。▼とても強い目的に従って作られた骨格のもと、ガソリンスタンドは確かに働いている。ここで述べたかったのは、目的を達成する為の計画の精度ではなく、目的の外にある、ある種の冗長性に対する精度についてである。（葛島隆之／葛島隆之建築設計事務所）

80 単純さのエロティシズム

『新建築』1991年5月号、新建築社

エロティシズムと聞いて直接的に連想するのは、豊潤な肉体性にあるような曲線美である。しかしここで篠原氏は、単純化という言葉とエロティシズムを結び付けている。その上で「白の家」（1966年）から「未完の家」（1970年）に至るまでの構成に、「禁欲的な空間」という批評が与えられたと語っている。▼単純化された禁欲的空間がもたらすエロティシズムとは、単にシンプルな空間であるから生まれるものではない。それは、表層的な部分では表すことが出来ない、深層から染み出てくるものではないだろうか。1本の柱や小さな開口の位置や形状といった微細な調整のスタディの蓄積から導き出された、空間のエロティシズム。それは、裏側にある多くのスタディから削ぎ落されて生まれた禁欲性に結びついている。写真で見る篠原氏の住宅空間の圧倒的な魅力は、その単純化によって訴えかけてくるエロティシズムによるものなのかもしれない。エロスをまとった空間は合理性を超越した緊張感を生み、人を惹きつける。（井端菜美／goboc設計事務所）

81 キューブの輪郭が、シリンダーの輪郭が、今、弾けた

『新建築』1991年5月号、新建築社

もしも「人間の輪郭が、今、弾けた」を「皮膚が弾けた」と言い換えてみるなら、その刹那、赤黒い体液が剥き出しの筋繊維の上をゆっくり落下していくイメージが私のなかに生じる。だがそんな肉体が仁王立ちしており、背後から朝日が昇るとしたら……。私たちの網膜には、皮膚が弾ける前と寸分違わぬシルエットが投影される。つまり、この言い換えは失敗している。そこで、「マトリョーシカの輪郭が弾けた」としてみる。この文字列が私たちの脳裏に書き込むのは、どんな情景だろうか？　そこで弾けるものはなんだろうか？　ひとつ内側のマトリョーシカが出てきたとしても、それは「輪郭」が弾けなかったことを意味するのみである。さっきまでの輪郭は表面に過ぎない。弾ける輪郭は、手触りによって説明される世界を否定していく。おそらくこれらの文字列が記述しているのは、私たちが肉体なしで、ひとつの空間に足を踏み入れる景色なのだ。（布施琳太郎／アーティスト）

82 輝く都市をきみは見たか

『新建築住宅特集』1993年1月号、新建築社

確信を持って「見た」と断言することはできないが、その輝きを遥か遠くに感じ、その光が指し示す先に、僕は確かに進んでいる。しかし、それは、あなたが時速100キロで走るハイウェイの上、滑らかに流れゆく景色の中で、わざわざ体を捻り、進行方向とは真逆のリアウィンドウいっぱいに見たあの輝く都市とは異なるだろう。僕はハイウェイを降り、車を降りて、これまで進んできた道を引き返し、歩調を時速4キロに落として、輝く都市を探し続けている。だが、それは都市というよりも、集落に近いのかもしれない。誰もが自らの輝く都市（あるいは集落）を見つけるために、道は数えきれぬほど広がり、そこへ至る手段もまた千差万別だ。建築は衰退したわけでも、撤退したわけでもない。それどころか、無数の輝く都市を目指して、道は細分化し、複雑に絡み合いながら、建築の未来を紡いでいくのだと信じて。（吉田夏雄／吉田夏雄建築設計事務所主宰）

83 前衛小空間

『GA Japan』1995年11—12月号、エーディーエー・エディタ・トーキョー

「前衛について」というテキストの中で篠原は、モダニズムの初期、民主主義という価値観の変化に伴って生まれた「装飾がないというたった一つのこと」が、生活感情を大変革したことに羨望の眼差しを向けている。装飾がないということは「装飾物に託された意味」の否定であると同時に、「装飾がないという身体感覚」の発明であろう。アドルフ・ロースが設計した住宅の内装を振り返っても、彼自身の身体や触覚に対する確信は疑いようがなく、モダニズムは身体の存在を初源に持つ思想ゆえに、生活感情を揺さぶる大運動に発展したと言える。しかしその途上、身体という主体は資本や消費に取って代わられ、地球資源の有限性という大問題に直面した。人間は、身体や道具の隅々へ意識を遣り、その向こう側の動植物や土、水、空気にまで感情移入することができる。私が考える「前衛小空間」とは、身体と地球との間に潜んでいる関係を予感して式を「たてる」、道具のような空間だ。（西澤俊理／滋賀県立大学准教授）

84 祝祭と機械

『新建築』1996年3月号、新建築社

私たちは建物をつくりません。私たちの建築は建物を変えることにあり、不変の建物を一から築くことを批判的に避けています。都市に潜む様々な構造とその裏の機械へ視野を広げるため、ときには公共の場で祝祭としての集団歩行を催します。▼私は「ストロロロジー」を塚本研究室で6年以上研究しています。スイス人の社会学者のルシウス・ブルクハルト（1925—2003）と芸術家のアンヌマリー・ブルクハルト（1930—2012）は、計画と設計と建築教育の批判的理論としてこの「歩行の学」を創設しました。篠原と同じく今年、ルシウス・ブルクハルトは生誕100周年をひと月早く迎えます。▼篠原も70年代に世界を旅し、その歩みを記録しました。この小文がふたりの邂逅を紙上で果たすことを願います。きっと、街を歩きながら互いの理論を支える景観を大いに比べ合うことでしょう。肩を並べ、視点を変える脚立を担ぎ、美と崇高を論じるふたりの姿が浮かびます。（Anne GROSS／スタジオ・グロス、訳：田村将理）

85 建築家は生涯を通してひとつの概念装置をつくる

『新建築』1996年3月号、新建築社

この文章が掲載されたのは、篠原さんが70歳の時。ご自身の概念装置は、「時間軸沿いの縦糸」と各時点の「コンセプトの横糸」を40年かけて織り上げたものとのこと。このタペストリーの中央あたり、篠原さん47歳の初海外に続く49歳（1974年秋）で初アフリカ一人旅を敢行しています。海岸沿い西アフリカの町の様子は、帰国後の旅行記風テキストに生き生きと記されていて、当時の横糸にも影響したようです。これを書いている私は、今42歳。初めて西アフリカに降り立ったのは2006年、25歳の時。深夜のタラップで感じた生ぬるい空気と暗闇は衝撃でした。私が概念装置をつくっているとは思わないけれど、それが考えや思いを織り込んだタペストリーであるという解釈が許されるなら、私はアフリカの人たちと共に私の1枚を織っている途中であるかも知れず、篠原さんの言葉からは、これからまだまだ未知の世界に踏み込む余地があると勇気をもらうようです。（樫村芙実／テレインアーキテクツ主宰、東京藝術大学准教授）

86 透明な幾何学

『篠原一男』TOTO出版、1996年

好きな散歩ルートの道中に、「上原通りの住宅」（1976年）がある。コンクリートは全体に黒ずみ、セパ穴の補修痕がグリッド状に白く浮かび上がっている。屋根の鋼板には、雨の軌跡が赤い縞を残す。三角形のガラスの奥には、ここが特等席だと言わんばかりに植木鉢が鎮座する。竣工から50年が経ち、建築の骨格が、変化した素材や人の生活によって、ほぐされている。ほぐされればほぐされるほどに、わたしはその骨格が動じないことに、感動せずにはいられない。▼大義名分なしに建てることが難しい現代において建築は、人がどのように使うか、メンテナンスはしやすいかを先回りして気配りするから、予定調和的になってしまう。しかし、篠原の建築はもっと謙虚である。生活が生み出すカオスをコントロールすることから距離をとっているにもかかわらず、そこにある人やものを解放させているように思える。時間が経った今だからこそ、透明な幾何学と人間の均衡が見えてくる。（殿前莉世／iii architects共同主宰）

87 前衛は軽装備で現われる

『篠原一男』TOTO出版、1996年

これは、篠原の論考「Unbuilt and yet Unbuilt」の最終段落の小見出しである。〈unbuilt〉のコンペ案を振り返り、ポストモダンの全盛期において、篠原が求めた複雑さの中の最単純解たち前衛は軽装備で〈yet unbuilt〉のまま待機している、と述べている。篠原の言う軽装備とは、構成方法と材料の種類において、さらに作品の数と規模においても最小限数で最大限の成果を得ることで、そこに篠原ミニマリズムの美学がある。建築とは〈built〉することだけではない。場を読み、そこに必要なものと方法を導き出すことである。ときには構築物を作り、ときには既存を壊し、あるいはただそれを掃除し、さまざまな位相のものをひとつの場として関係づける。最小限の「手」で作られた場は、風通しがよく美しい。軽装備の建築は既存を活かし、無駄なプロセスがなく、廃棄物もエネルギー消費も少ない。時代が変わり、建造環境が転回しても、建築の前衛はいつでも軽装備で現れるのだ。（常山未央／Studio mmm/ HOLES）

88 プライマリー幾何形の集まりが光のなかで揺らめく表情

『篠原一男』TOTO出版、1996年

最近、インド西部の都市ムンバイを訪れた。昔の呼び名はボンベイ。植民地時代の名前ではあるが、どこかハイカラで輝かしい雰囲気を纏ったその名前を使う人は今も多い。ボンベイの海は内湾にあり、東を向いている。波は穏やかで、無数のヨットやボートそして帆船が浮かぶ、おびただしい断片たちの表面を朝の柔らかな陽の光がゆらゆらと煌めき動く中、たくさんのカモメが宙を飛び回っている。そんな朝の美しい光景はお構いなしに、現地の獰猛なタクシーたちが観光客に向かってブーブーとクラクションを鳴らしながらけたたましく走り抜ける。私は海を眺めながら、その場所を動かずにしばらく立ち尽くしていた。感動したのかあるいは疲弊したのかもわからないくらいに、この世界に目眩がした。めくるめくリアリティ。光という無形を、あるいは目眩という体験を、どうにか自分の手で扱いたいと人間が必死に生み出したのが、幾何学という手段なのかもしれない。（佐藤研吾／一般社団法人コロガロウ、佐藤研吾建築設計事務所主宰）

89 ハード・エッジの空間

『篠原一男』TOTO出版、1996年

軟体動物のような字体が広まるやさしい現代日本に、鋭い描線、鮮烈な色彩をもつハード・エッジ絵画の居場所はあるか。60年前の米国西海岸にはあった平板な画面は、力動的な筆触、絵画的な熱い抽象表現主義への対抗だった。その30年後篠原は、建築より民俗に属するというポストモダン都市のカオス、祝祭のダイナミズムに抗い、ギリシア精神由来の初等幾何学＝RC造の立方体を大小に用いたハード・エッジの空間を、方法論的なバリアとした。ここに美術史家ヴェルフリンの対概念〈絵画的／線的〉を援用するならば、建築は線的な秩序の下にしかない。しかし篠原の筆致は、建物群が無音の壮大な合唱をなす絵画的なスカイライン、建築家の混沌たる衝動を映して輝く都市、幾何学形態が光り踊る表情へ

の憧憬を隠さない。両者の止揚、合理の極致たる非合理、最小限のカオスを含んでなおラショナルという境地は、例えば「東京工業大学百年記念館」（1987年）のシリンダー軸に示された。（天内大樹／青山学院大学准教授）

90 静かな力動性

『篠原一男』TOTO出版、1996年

「静かな力動性」は、一見相反する言葉が組み合わさっているように感じられる。力動性（ダイナミズム）には、力や作用、変化や運動という動的な意味合いがあるからだ。一方、静かさについて考えてみると、それは環境に音が無い状態ではない。冷蔵庫の音、飛行機のエンジン音、虫の声、波の音、雨の音、スープを煮込む音、家族の寝息、自分の鼓動。こういった音が静かさと共にある。静かさとは、音が心や身体を逆撫でることなく、ある一定のリズムと共に無意識へと遠のいていった状態とも言えるかもしれない。「静かな力動性」という言葉で目指された建築は、きっと呼吸をするように動き続けているのだろう。そして同時に、リズムを持ち、環境に馴染みながら、遠くのいつかへ向かって変化を受け入れじっと佇む強さもあるのだろう。いつか誰かが耳を澄ませ、世界が目撃されることを待っている、しなやかで強い建築だ。（榮家志保／EIKA studio）

91 極小生活空間と巨大メトロポリス

『新建築』1998年12月号、新建築社

篠原は、東京発の都市論を打ち立てようとする。彼が重視するのは中世以来の極小空間に見られる「秩序の美」と、渋谷に代表される巨大都市が生み出す「混沌の美」の二つだ。しかし、篠原の書きぶりは東京が欧米の人々にとってエキゾチックな対象であり、オリエンタリズム的な眼差しを向けられていることに無頓着で、誇らしげですらある。彼も「まなざす主体としての西洋」から自由ではなかったのだ。この論考から、四半世紀が経った。もはや東京に中世の美が息づいているとは言いがたいかもしれない。一方、渋谷は再開発を経て多少の猥雑さを失ってもなお、エキゾチックな存在として世界中の人々を集めている。そして、その大部分は東アジアと東南アジアの人々だ。彼／彼女たちは、この都市に何を求めているのだろうか。欧米のアンチテーゼとしての「東京」を語ることはとうに陳腐化していて、いま一度多元的な世界の中でこの都市を語りなおす必要があるだろう。（谷繁玲央／東京大学特任研究員、青木茂建築工房設計スタッフ）

92 超大数集合都市

『GA Japan』1998年7—8月号、エーディーエー・エディタ・トーキョー

篠原は、江戸から現代にかけ都度更新され続けてきた雑多で混沌とした都市風景に、日本固有の美と魅力をみた。私も20代の大半を東京で過ごし、下町の伝統と最新技術がダイナミックに同居する都市空間に暮らす悦びを感じていたので、大いに共感する。しかし、氏の死後ここ20年の間にグローバル経済はさらにドライブを続け、私たちは震災やパンデミックを経験し、都市生活の脆弱性が露呈された。少子高齢化と空き家の増加、高気密を是とするあまり消失する界隈性、巨大資本を振りかざしたような面開発……。篠原がみていた生き生きとした都市風景が徐々に減少していると感じるのは、私だけだろうか。氏も指摘したように、都市が成立するためには、それを取り巻く自然環境の許容量に余裕があることが前提となる。限界に達した資本主義社会を乗り越えるためには、受動的に資源の消費者で居続けるのではなく、皆が少しでも生産側に関わることがトリガーとなると考えている。（澤 秀俊／澤秀俊設計環境、SAWADEE主宰）

93 異邦人の眼差し

『GA Japan』1999年5—6月号、エーディーエー・エディタ・トーキョー

見方を拡げることと同時に、情念を揺さぶられる身体に素直になって生活する場を見直そうとする視座を持つ言葉。▼『超大数集合都市へ』という著作の中で世界を旅した篠原は、ミハスを「硬質さと優しさが共存する丘陵の道」、フェズを「けものみちのような路地」、ワガズグを「水平に視線を止める特徴の強い樹木」と表現し、身体と土地との関係を丁寧な形容詞と共に語る。そういった異文化の価値観を携え、慣れ親しんだ東京を都市として見つめなおしていこう、という意思に感動する。▼しかしカオスの美が発展した現代の日本の都市空間において、生活と空間が一体となった美しさを感じられるのか。▼それは、現在の渋谷で、再開発と小さなビル群がひしめき合い、記号と虚像が溢れる中でも地形的な段差や階段に多くの人が腰掛けていることにも表れているのではないか。地形を含めた過去からあるものと身体が触れる瞬間にその美が立ち上がり、共有されているのだ。（柿木佑介＋廣岡周平／PERSIMMON HILLS architects共同主宰）

94 成熟した都市混乱

『建築雑誌』2000年12月号、日本建築学会

「成熟した都市混乱」は、世紀の変わり目における都市の状況を評した言葉だ。それは、モダニズムが展開しながらも、モダニズムの論理のみによらない複合的な論理の集積が現出した都市の状態であり、そして、篠原はこれを新たな建築空間を駆動させる基盤として捉えていた。▼それから、約10年後。私は大学からの友人たちと、浜松という一地方都市で活動を始めた。そこに拠点を構えた動機はそれぞれ異なっていたであろうが、個人的には大学院のときに培った経験から、地方都市ごとに固有の都市混乱があることを知り、さらにそこでは混乱の内側から僅かな秩序をもたらすことができるのではないかと思ったからである。▼その後、幸いにも携わることができた小さなプロジェクト群やまちづくりの活動は、都市に身を置きながら、都市における固有の事象との接続を図ったものである。都市混乱の中にあって、それらが微力ながらでも次への目印となることを期待している。（彌田 徹／403architecture [dajiba] 共同主宰、渡辺隆建築設計事務所所員）

95 新種の開放系都市

『超大数集合都市へ』エーディーエー・エディタ・トーキョー、2001年

「新種の開放系都市」とは何か。熱力学の分野では、系（物質の集合）は開放系、閉鎖系、孤立系の3つに分類される。開放系は外界とエネルギー・物質を交換し、閉鎖系はエネルギーのみ交換し、孤立系はエネルギー・物質とも交換しない系である。それらを都市になぞらえるならば、人や物資、エネルギー、情報等が忙しなく出入りする近現代の都市は、開放系といえそうだ。▼ここまで悶々と考えたところで『超大数集合都市へ』を読んでみた。篠原は、「古い習慣」を保持しつつ「巨大資本が駆使する現代技術の物質属性」に巧妙かつ乱暴に対応する東京を「新種の開放系都市」と表現し、様々な時間軸が錯綜する秩序と混沌のなかに「空間の快楽」を見出した。カオス理論を援用した論述は難解だが、熱力学と美学を軽やかに架橋する都市論はなんとも魅力的である。集合体としての都市が内包する時間に対する鋭い感性こそが、篠原の創作の原動力だったのではないだろうか。（長谷川 香／東京藝術大学准教授）

96 形と言葉の舞台を横切って

『アフォリズム・篠原一男の空間言説』鹿島出版会、2004年

設計と制作との間の共振、相反の働きに注目しつつ、はるか前方の風景のなかでも機能しうる、設計あるいは制作の射程に期待している。▼ひとつの制作が次の新しい制作を呼び起こす保証はなく、まして新しい設計に直截関わる保証もない。▼双対的に、設計から制作の組み立てへの通路も同様である。▼しかし、子供の積木遊びのように、あるとき、設計の組み立て作業が、確かな脈絡を現わさないままに、次の制作の断片を思いがけなく拾ったこともあった。▼目の前にあったひとつの形が、そのとき足踏みしていた設計の次のステップを押し出す切掛けになったこともある。▼人形浄瑠璃の人形師と、人には見えないことになっている黒子の動きのように、設計と制作が共振して、次の設計あるいは制作の新しい〈見えを切る〉瞬間に出会うことを心待ちにして、私は設計と制作を続けている。（甲斐貴大／studio arche inc. 主宰）

97 次の原初の空間

『アフォリズム・篠原一男の空間言説』鹿島出版会、2004年

「次の」。この頭の言葉がまず重厚だ。「新しい」とはまた違う、まだ見ぬものへの言葉。「新しい」に「古い」という対比があれば、「次の」にはその前後に隣接がある。時流に流されず、しかし社会の状況には鋭敏に、その状況に対し常にオルタナティヴであれ。そんな構えがこの言葉により早速投げかけられる。▼そして「原初の空間」と続く。考えてみれば、そう言い切れる空間に出会ったことは幾度あるだろうか。スニオン岬で見た神殿がどうにか頭に浮かぶが、篠原が記した言葉という認識が今それを遮って、例えば木立の奥に見た「谷川さんの住宅」（1974年）のとても大きく感じた佇まいが、同質の永遠性をもって頭のなかに立ち現れる。▼篠原がこの言葉を書き留めた文献を紐解けば、形と言葉の往来のなかでときに出会う、何かが生まれる際の柔らかな、気配のような瞬間の記述があった。その種のような瞬間が次には、永遠の存在として刻まれうることをこの言葉は示している。（小坂 怜＋森中康彰／小坂森中建築）

98 ヴィヴィッドな空間論の誕生と変貌

『建築雑誌』2005年8月号、日本建築学会

現代において、認識を強烈に広げる箴言たる言葉に新たに出会うことは少なくなっているように思う。また、機械から生成される言葉を介した無数のイマージュは、言葉と人の間にある無限の創造性を限定してしまう可能性も孕んでいると感じる。世界に対する情報の解像度があがり、膨大な知識や言葉に容易にアクセスできる現代社会において、今なお我々に問いかける篠原の言葉がもつ輝き、または魔力とも呼ぶべき引力は何か。個から発せられた強烈な言葉は時間を超え、時には本来の意とずれながら、実際には篠原の建築のうち数えるほどしか体験していない我々にも空間論として生き続けている。精緻な解像度で語られ、容易に理解できる現代の言葉は清々しく開かれている一方で、世界とは個人の思想や言葉の集合であることも事実である。そういったゆらぎの中でこそ我々は言葉をつむぎ、空間論の行方を示していかなければならない。（farm／村部 墨：farm、藤本章子：farm、熊本大学助教）

99 モダニズムの見事な群生

『建築雑誌』2005年8月号、日本建築学会

篠原にとってのモダニズムは、ル・コルビュジエのドミノ・システム、ミースの「ファンズワース邸」など建築の原型をつくる主体的で活気ある作業を指す。この原型への探求は個から出発した認識を徹底的に追求し、それを反転させて社会との新たな関係を提示する、個から普遍への思想の構築であった。さらに、モダニズムが原型に対してヴァリエーションを量産する作業へと拡張する状況に対し、彼は慎重かつ懐疑的に向き合い続けた。現代の私たちも、合理や科学を基盤に建築の原型とするモダニズムの群れに身を置くなか、篠原との違いとして私自身が認識するのは、個か共かという原型の出発点である。私が継続してきたロッジアに関する研究や、共同体の知性を活力とする創作は、「共〈コモン〉」を前提に建築の原型へと向かう。モダニズムに身を置きながらも、共を出発点にプレモダンの追求と反転を試み、現代社会との新たな建築の地平を提示したい。そんなことを考えている。（金野千恵／tec代表、京都工芸繊維大学特任教授）

100 通りと人影

『通りと人影』現代美術センターCCA北九州、2006年

「通りと人影」が篠原自身の問いなのかと言われると、疑問が残る。それは、もともと2004年に彼が参加したシンポジウムの題名であり、その2年後、没年に出版された、70年代から80年代にかけて彼が撮影した海外の街路写真をまとめた本の題にもなった言葉だ。この『通りと人影』には、シンポジウムでの講演が収められている。そこで篠原は「集落」という言葉を用い、近代的な計画主義からこぼれ落ちつつも、現代に多く存在している都市の様相を表現した。しかし、それらは集落と呼べるほど牧歌的で自然発生的なものは少なく、むしろ世界中の都市が十分な準備もないまま、つぎはぎの秩序で巨大化していった19世紀的な風景を示しているように思える。そこを歩くのは、ル・コルビュジエが描くような近代主義的な人間像ではなく、ポーの『群衆の人』のように、明確な輪郭を持たず、大都市の中で不確実な運命に賭け続ける、まさに影のような人々である。（橋本吉史／WAREHOUSE代表、建築史家）

＊各執筆者の文体を生かすため、表記の統一を行っていない箇所があります。

KAZUO SHINOHARA
Inscribe Eternity in Space
A centennial exhibition with 100 questions
TOTOギャラリー・間 40周年記念企画1
篠原一男 空間に永遠を刻む —— 生誕百年 100の問い
2025.4.17|木|—6.22|日| TOTOギャラリー・間